〒432-8007 浜松市神原町634-1
浜松市埋蔵文化財調査事務所
TEL〈053〉485−3070
FAX〈053〉485−3465

浜松市指定文化財

浜松城跡

——考古学的調査の記録——

一九九六年三月

浜松市教育委員会

巻頭写真　御家中配列図（部分）　青山家が城主をつとめた十七世紀後半ころの浜松城下が描かれています。

刊行にあたって

浜松市教育委員会では、昨年度、『浜松市指定文化財－古墳－』を刊行し、市内に現存する貴重な文化財のうち、石室を見学することのできる古墳をご案内いたしました。

本年度は、同じく市指定文化財であります浜松城跡についてご紹介する運びとなりました。

浜松城は、のちに天下人となる徳川家康が一戦国大名であった壮年期に、長くその居城としたことは、すでにご存じのとおりです。しかしながら、浜松城の前身とされる引馬城は、十五世紀後半には築城されたと推定されています。家康によって、十六世紀後半に戦国の城として拡張された以後も、明治維新をむかえ廃城となるまで、数多くの大名が入城しています。この約四百年間にわたる城と城下の変遷は、必ずしも明らかではありません。

本書では、引馬城の時代、すなわち駿河今川氏支配下の時代から、家康が城主だった時代、豊臣秀吉の政権下で秀吉家臣の堀尾吉晴が入城した時代、江戸時代の譜代大名がつぎつぎに交替した時代まで、とりわけ考古学的な資料にもとづいてご紹介することにいたしました。浜松城跡では、これまでに正式な発掘調査は実施されてはいません。それでも、各種の工事や整備事業にともなう立ち会い調査で、瓦や陶器、石垣などが発見されています。これらを全国の城跡ですすむ発掘調査の成果品と比較することで、古文献からだけではわからなかった城の実体も、考古学的な成果を根拠として、浮かび上がってまいります。

本書によって、あらためて各時代の浜松城をご想像いただければさいわいです。

平成八年三月

浜松市教育委員会　教育長　河合　九平

浜松城　歴代城主在位一覧表

西暦	城主	地域の支配者	関連出土品	できごと
1565	飯尾賢連・乗連・連竜	今川氏		1565（永禄八）年　今川氏真、飯尾連竜を殺害
1570	徳川家康	徳川氏		1568（永禄十一）年　徳川家康、遠江に侵攻 1572（元亀三）年　三方原の戦い、家康敗北 1578（天正六）年　浜松城修築（天正九年まで） 1579（天正七）年　信長の命で、築山殿と信康を殺害
1590	（城代）菅沼定政			
1600	堀尾吉晴・忠氏	豊臣氏		1586（天正十四）年　家康、秀吉の臣下となる 1590（天正十八）年　秀吉、家康に関東移封を命ず 1598（慶長三）年　秀吉没する 1600（慶長五）年　関ヶ原の戦い 1601（慶長六）年　家康、東海道に伝馬制を制定
1601	松平忠頼	徳川氏（将軍家）		
1609	水野重仲			
1619	高力忠房			1616（元和二）年　家康没する 1619（元和五）年　徳川頼宣、紀伊に移封される 1620（元和六）年　幕府、諸大名に大坂城の修築を命ず
1638	松平乗寿			
1644	太田資宗・資次			1655（明暦元）年　大風雨により、浜松城内に被害
1678	青山宗俊・忠雄・忠重			1675（延宝三）年　小天竜が庄助堤により締め切 1680（延宝八）年　大風により、浜松城内に被害 1691（元禄四）年　城内の屋敷で火災
1700				1700（元禄十三）年　城内の屋敷で火災
1702	本庄（松平）資俊・資訓			1706（宝永三）年　城内の屋敷で火災
1729	松平信祝・信復			
1749	松平（本庄）資訓・資昌			
1758	井上正経・正定・正甫			
1800				
1817	水野忠邦・忠精			1822（文政五）年　鉄門東櫓を修理する
1845	井上正春・正直			1854（安政元）年　翌年にかけて２度の地震で被害 1860（万延元）年　天竜川が決壊し、城下に被害
1868				

浜松城の成立をさかのぼる

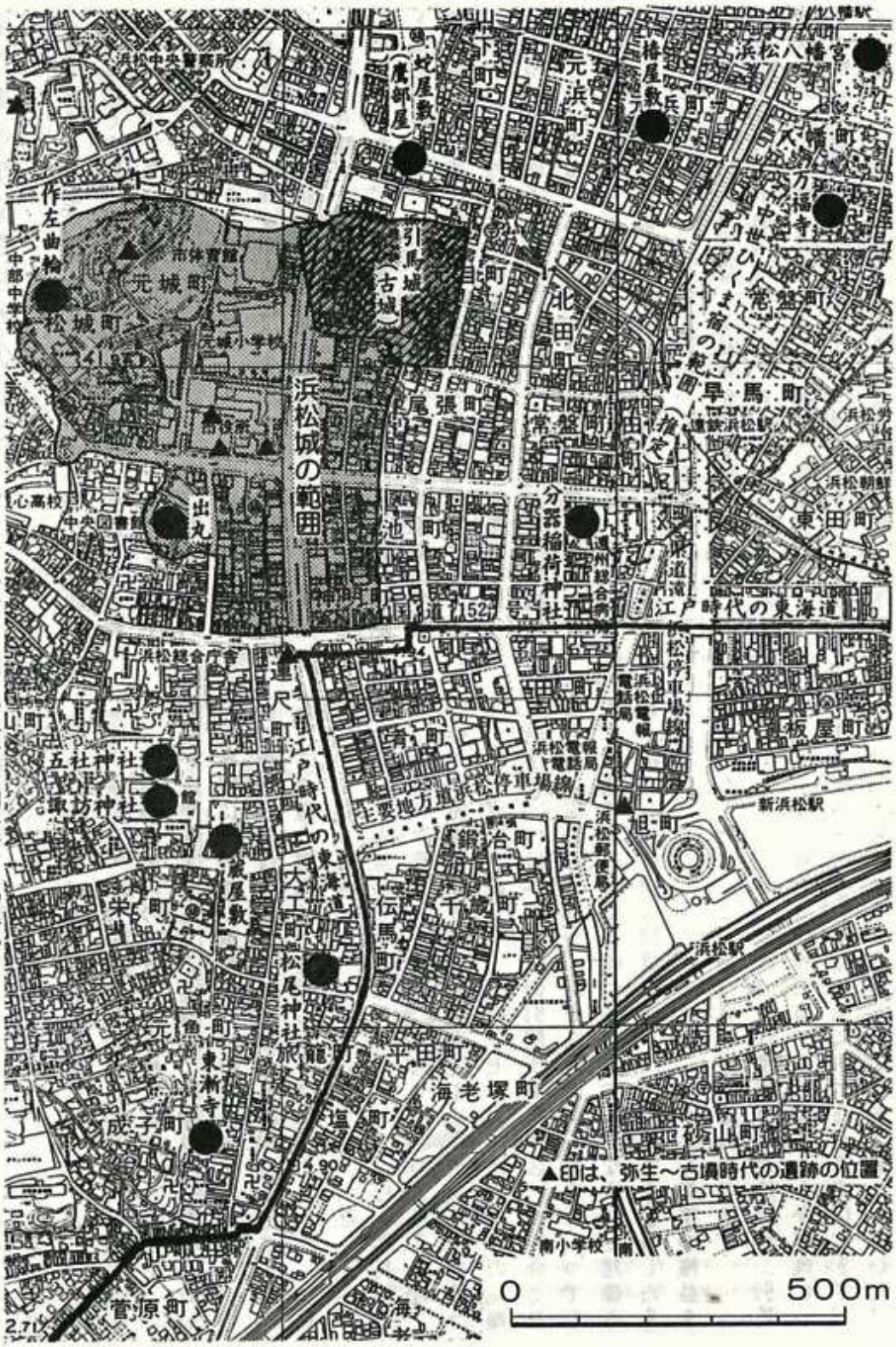
浜松城は、元亀元年（一五七〇）、本格的に遠江経営にのりだした徳川家康が、三河岡崎城から本拠地を移動したことで変革することになりました。家康はその一年以上前にあたる永禄一一年（一五六八）一二月に、今川支配の弱体化した遠江に初めて侵攻し、浜松城の前身である引馬城に入城を果たしていました。当初は見付（現在の磐田市）に新しい城の建設を始めましたが、同時期に甲斐から駿河を制圧し、遠江へも侵攻した武田信玄との対立関係から、これを断念し、天竜川西岸の引馬の地を選んだといわれています。この選択には、家康の背後に同盟者として存在した織田信長の指示もありました。

家康は引馬の城を本拠地とし、この後天正年間にかけて本格的な造成工事をしています。したがって、正確に表現するならば、家康は浜松城を築城（新築）したわけではなく、もともとあった城を増改築したというべきでしょう。では、浜松城の最初の築城者はだれかということになると、実は、はっきりわかっていません。

「浜松」という地名は、浜松市伊場遺跡から出土している奈良時代の木簡に「浜津」とあって、これが起源と考えられています。これに対し「引間」の確実な例は源平の戦いの前夜（一二五〇年代）に現れます。この地名の記載方法には「ひくま・引ま・ひきま・匹馬・ひき馬・引駒・曳馬・曳駒」などもあって安定しません。本書では表記の便宜上、「引馬」を使用しておきます。

建治三年（一二七七）の鎌倉旅行記を書いた阿仏尼の『十六夜日記』には「今宵はひくまの宿という処に留まる。この処の大方の名は、はま松とぞ言いし」とあって注目されてきました。この時期、現在の浜松市中心部から南西部にかけて「浜松庄」と呼ばれる荘園があり、荘内の街道筋には「引馬」と呼ばれる宿が成立していました。この宿の実体は未だ明らかではありませんが、江戸時代の地誌『曳駒拾遺』は「野口・八幡・玄黙（元目）等の地」を元浜松と推定しています。このほか早馬の地名は中世の早馬（はゆま）に起因するものと考えられ、中世の東海道が江戸時代の東海道よりもやや北側を通っていたと推定されます。文明一七年（一四八五）の『梅花無尽蔵』には「浜松庄の引間市富屋千区」と紹介されるなど、定期市も立つ、街道を代表する都市の一つでした。現在の馬込川は当時は天竜川の主要な流れと想像され、宿からの船便も開設され、川岸には富を蓄積した倉も立ち並んでいたことでしょう。こうした都市の権益を掌握した人物が、この地に城を建設したのです。

いずれにしても、家康の遠江侵攻以前の浜松城（引馬城）は、駿河府中（現静岡市）を本拠とした今川氏という強大な戦国大名の支配地域にあった一支城にすぎず、それ以上の発展はのぞめるものではありませんでした。



図一　浜松城跡の範囲　浜松市発行の一万分の一地形図（一九八一年測量）に加筆。

浜松城の位置と地形の利用

浜松城跡は、天竜川下流平野の西岸、三方原台地の南東端にあたる河岸段丘を利用して築かれています。現在はJR東海道線の浜松駅から北東へ約一キロメートル、浜松市役所の背後に石垣と復興天守閣を臨むことができます。浜松市の指定史跡とされている石垣も、この天守曲輪と本丸の一部だけですが、江戸時代の浜松城全体の範囲は、格段に広かったことが知られています。

図一は、現在の地図の上に、最盛期の浜松城の範囲を推定して加筆したものです。南は連尺町の交差点付近に大手門があって、北は約七〇〇メートル離れた下池川の低湿地を天然の要害としていました。東は馬込川から続く低地と段丘との境に（この高低差は現在でも元目町や尾張町付近で確認することができます）、西は場所によって幅が異なるのですが、最大で約六〇〇メートル、中部中学校付近の作左山を限りとしていました。

大正時代ころまでは城内の各地で堀や土塁も確認できたようですが、現在では都市化が進み、土塁は崩され堀は地下に埋もれてしまいました。わずかに天守曲輪と本丸周辺の石垣が名残りです。現在の天守閣は昭和三三年に鉄筋コンクリートで作られました。天守閣の古図面は現存せず、根拠はありません。また、経費捻出の関係で、天守台の大きさよりも小さなものになっています。

なお、城内の建物は明治初期にはすべて失われています。天守閣にいたっては、巻頭写真に見るように、江戸時代初期からその存在が確認されていません。

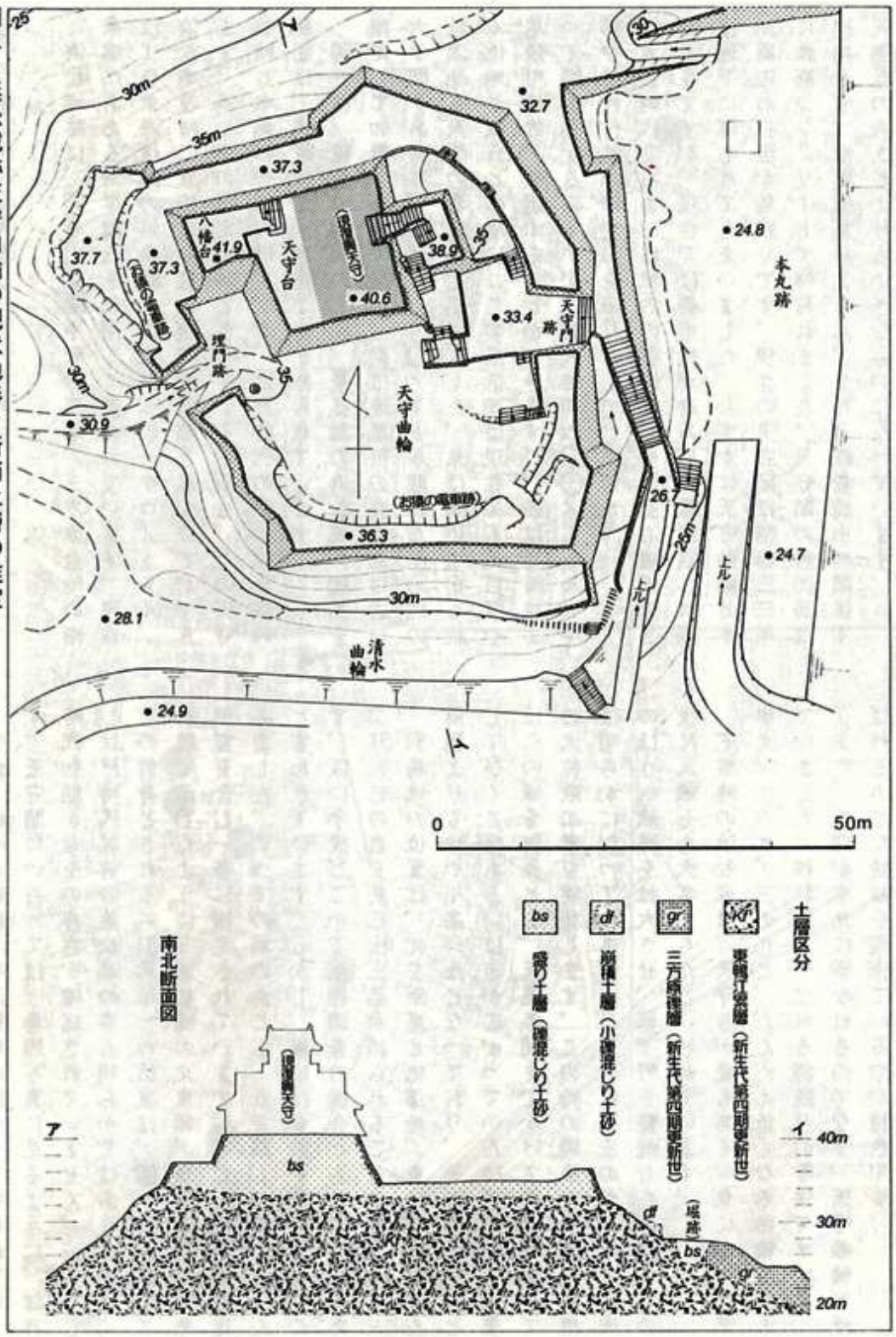
江戸時代以前の浜松城の姿も明らかではありません。その前身とされる「引馬城」の位置は、図一にも重ねて斜線で示したように、浜松城の北東部、現在の元城町東照宮を含む一帯に推定されています。ここも都市化が進みました。かつての堀のあとも、丘を崩して埋め立てたと言われています。しかし、堀には資料が残りやすいので、仮に今後どこかで発掘調査の機会があれば、数百年ぶりに日の目を見る出土品が得られることでしょう。

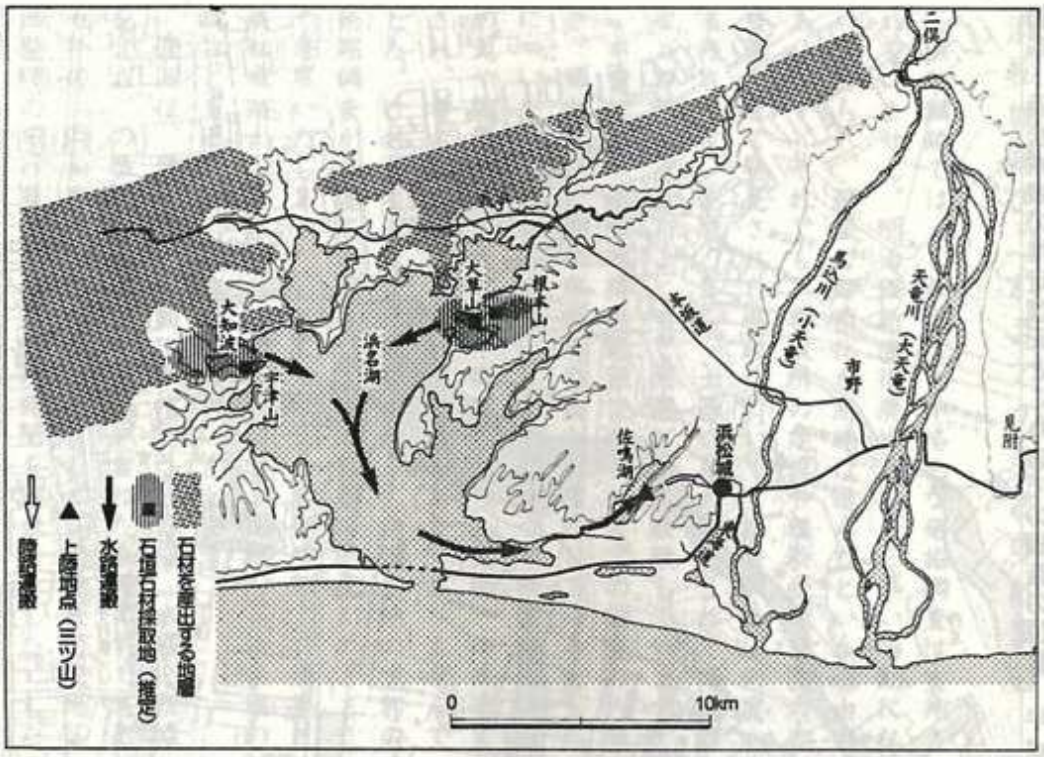
引馬城の位置は、北を断崖と低湿地、東に堀を配した周囲よりもやや小高い丘となっており、その東を中心としてひくま宿あるいは市が広がっていたはずです。家康はこの城を拠点とし、天正年間までかけて作左曲輪までの大拡張工事を実施します。この時の縄張りや城の規模は明らかになっていません。さらに、三の丸をはじめ南のほうへ城域を拡大させ、城下町を整備したのは、その後に入城した大名たちだといわれています。

完成時の浜松城は、天守台が最も高く、東に向かって本丸、二の丸、三の丸と、だんだん低くなる曲輪を配していました。梯郭式と呼ばれる縄張りの手法です。

また、天守が本丸に築かれるのでなく、天守曲輪と呼ばれる小さな曲輪を備えているのが特色です。

図二　浜松城跡天守曲輪の現状地形と断面土層の推定





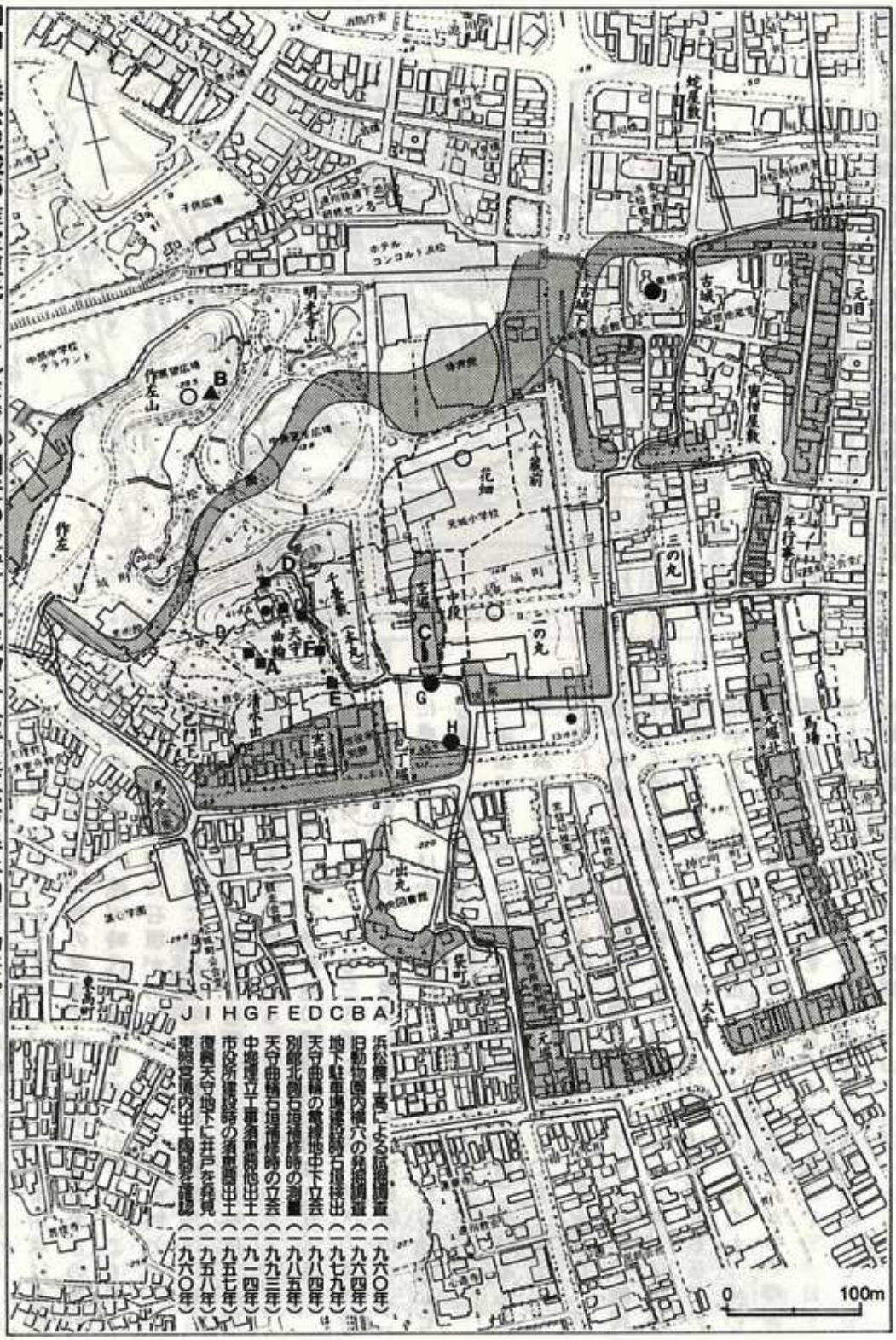
図三　浜松城跡石垣の石材産地と運搬経路の推定

天守曲輪は、掛川城・和歌山城などにも築かれていますが、類例は多くありません。ちなみに、掛川城は豊臣秀吉家臣の山内一豊の建設です。和歌山城は秀吉の弟・秀長の建設で、徳川時代の増築と手法が異なります。

浜松城で全周に石垣がめぐるのは、天守曲輪と本丸だけです。天守曲輪に残る石垣も、斜面上半部だけに見られます。いわゆる「鉢巻き石垣」です。浜松城は、全体的には石垣の少ない城であることも特色といえます。

天守曲輪は、三方原台地の標準的な海抜よりも高く、鴨江や高町にも見られる三方原よりも古い時代の堆積物・東鴨江累層にあたると考えられます。浜松城は、ここに盛り土したほか、台地に入り組んだ小さな谷地形なども有効に利用して、縄張りをしていたようです。

浜松城の石垣の石材は、チャート（珪岩）がほとんどで、浜名湖北岸には広く認められる岩石です（図三）。このため、浜名湖の水運を利用し、湖岸に露出した大草山や対岸の宇津山付近から切り出し、佐鳴湖東岸で陸揚げして浜松城まで運搬したと想像されています。佐鳴湖東岸の「三ツ山」には、かつて浜松城に運ばれる石との伝承を持つチャートが露出していました。ただし、城の石垣には、少量ながら大草山付近には認められない輝緑凝灰岩なども見られます。したがって、細江や三ヶ日を含む奥浜名湖のどこかか、二俣付近の天竜川支流も、石材調達地の候補として想定しておく必要があります。



図四　浜松城域の推定復元とこれまでの調査の位置　平成四年発行浜松市基本図に加筆。

A　浜松駅工事による試掘調査（一九六〇年）
B　自動車図内横穴の発掘調査（一九六四年）
C　地下駐車場建設前石垣検出（一九七九年）
D　天守曲輪の発掘地中下立会（一九八四年）
E　別郭北側石垣補修時の測量（一九八五年）
F　天守曲輪石垣補修時の立会（一九九三年）
G　中地埋立工事発掘地出土（一九一四年）
H　市役所建設時の発掘出土（一九五七年）
I　復興天守地下に井戸を発見（一九五八年）
J　東照宮境内出土陶器類を確認（一九六〇年）

浜松城跡のこれまでの考古学的調査

浜松城跡では、これまでに本格的な発掘調査は実施されていません。明治維新直後廃城となり、早い時期に払い下げられ、開墾や都市化が急速に進んだという理由もあります。それでも、市役所の建設や現浜松城公園内の整備などで発見された遺跡について、立会調査は何度か実施されています。また、土器や瓦が発見されて博物館などに照会されたことも、何度となく経験しています。

本書では、浜松城跡の範囲でのこれまでの調査の内容と、博物館など浜松市教育委員会が確認している出土品について、ご紹介してまいります。かつて戦国時代以後の瓦や陶器の破片などは、文字どおり「瓦礫（がれき）」の代表とされ、考古学の対象とされることもあまりありませんでした。けれども、ここ十数年の間に、全国各地の城郭の発掘調査が急速に進展し、瓦や陶磁器の研究がめざましく発展いたしました。以下では、全国の城郭での成果と浜松城跡から採集されている資料とを比較し、浜松城の成立と変遷について改めて検討いたします。

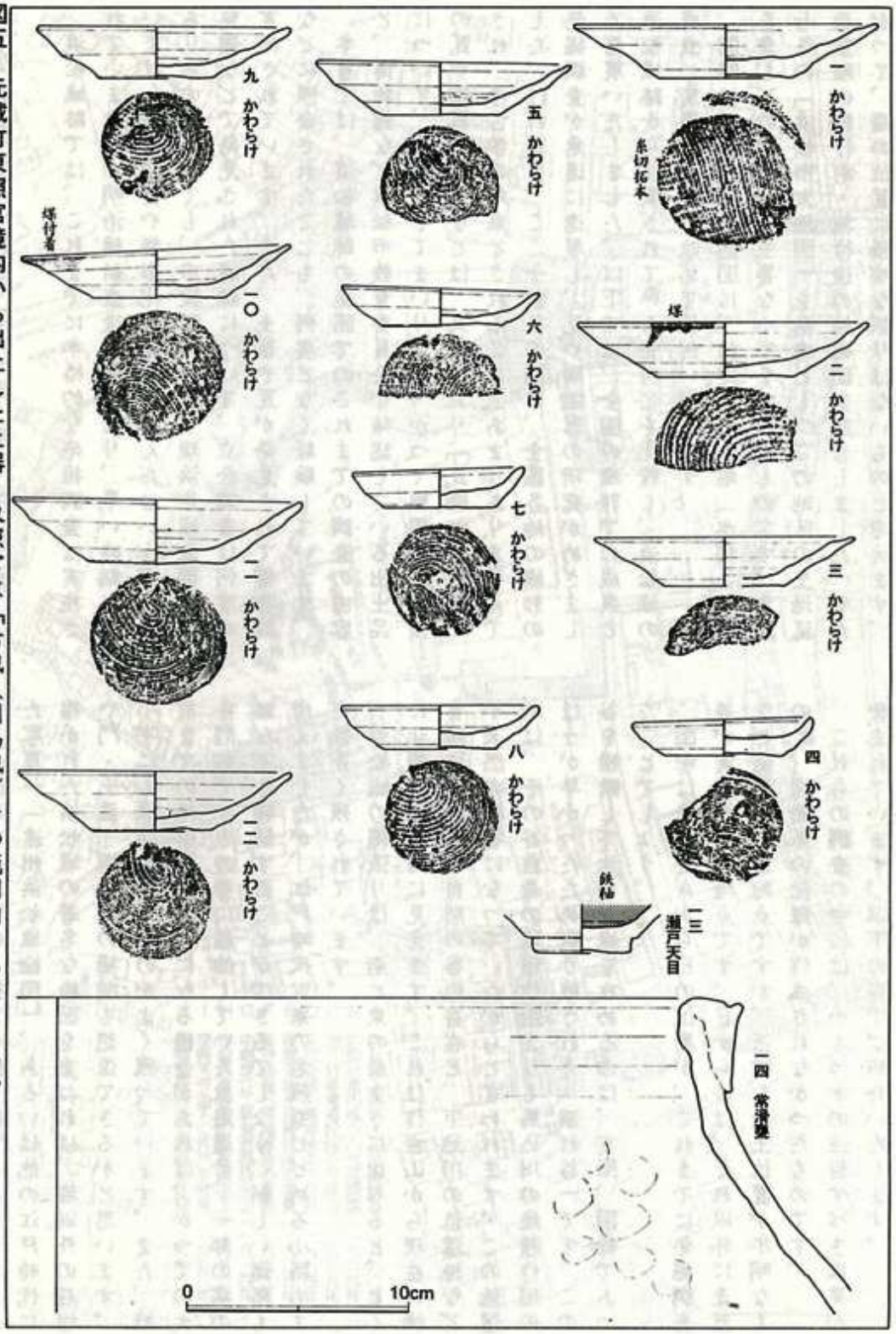
図四は、現在の地形図に、推定される堀（水堀・空堀を含む）の位置と、主要な小字を重ねたものです。大正七年の「浜松市大地図」を基本とし、この地区の土地区画整理の施行前・施行後の地籍図を照合しました。したがって、堀の位置に極端な誤りはないものと考えます。

この図に本書巻頭の「御家中配列図」、巻末に掲載した写真一「遠州浜松城絵図」、あるいは他の江戸時代に描かれた浜松城の著名な絵図を重ねれば、堀以外の石垣や門・土塁・塀などの場所も想像できるかと思います。小字にも城跡を示すものがよく残っています。また、戦前までの地形図をご覧になる機会があれば、かつての大手門前でかぎの手に屈曲していた東海道や、一部の堀の跡なども確認することができるでしょう。新しい道路も増えましたが、江戸時代以来の名残をとどめる小路もまだ数多く残されています。

浜松城の縄張りは、南と東の厳重さに比べると、とくに北西側が希薄に見えます。これは作左山から現在の体育館に向けての自然の谷の存在と、下池川の低湿地などが天然の要害になっていたからと言われます。この低湿地は、その谷自身の堆積作用よりも馬込川の堆積作用のほうが早かったため取り残された「溜（おけ）れ谷」です。この谷を横断して北から城を攻めるのは、実際、困難であったことでしょう。

図中に表したAからEの位置が、これまでに発掘調査等が実施された地点です。FからJは、それ以外に土器など発見された地点ですが、正確な出土位置が不明なものと、図面等の記録が作成されなかったものです。

これらの調査の中には、いくつかの注目すべき成果が含まれています。以下の頁でご紹介いたします。



図五　元城町東照宮境内から出土した土器　東照宮は「古城（引馬城）」の範囲内にあたります。

引馬城跡から出土した土器

図五は、元城町東照宮の境内から採集された土器で、一九六〇年に、浜松市立郷土博物館（当時）に照会されました（写真一四）。残念ながら、正確な場所や出土状態は不明です。東照宮は、明治維新以後に勧請された社で、江戸時代は浜松城内に含まれる米蔵が建てられていました。絵図にはさらに「古城」と表記されることが多く、引馬城はここ一帯に比定されてきました。

土器のうち一から一二は「かわらけ」と呼ばれる素焼きの土器です。口径十二センチメートル以上の大型品と口径八センチ前後の小型品に分けられますが、いずれもろくろ回転で作られ、最後に糸切りによって切断されたようすが底面に残ります。口縁部をやや細目につまむ整形も共通するなど、一括性の認められる資料群です。二や一〇の口縁に煤が付着していることから、灯明皿に使用されていたこともわかります。

同時に発見された一三は、瀬戸または美濃の窯で作られた天目茶碗という陶器の破片です。一四は常滑焼の大きな甕の破片で厚い口縁の形に特色があります。

これらの陶器は、各地の戦国時代の遺跡から出土していて、おおよその年代観も示されるようになってきました。ここでは小破片ではありますが、十五世紀末から十六世紀前半という年代を呈示することができます。引馬城が今川支配下で機能していた時代にあたります。

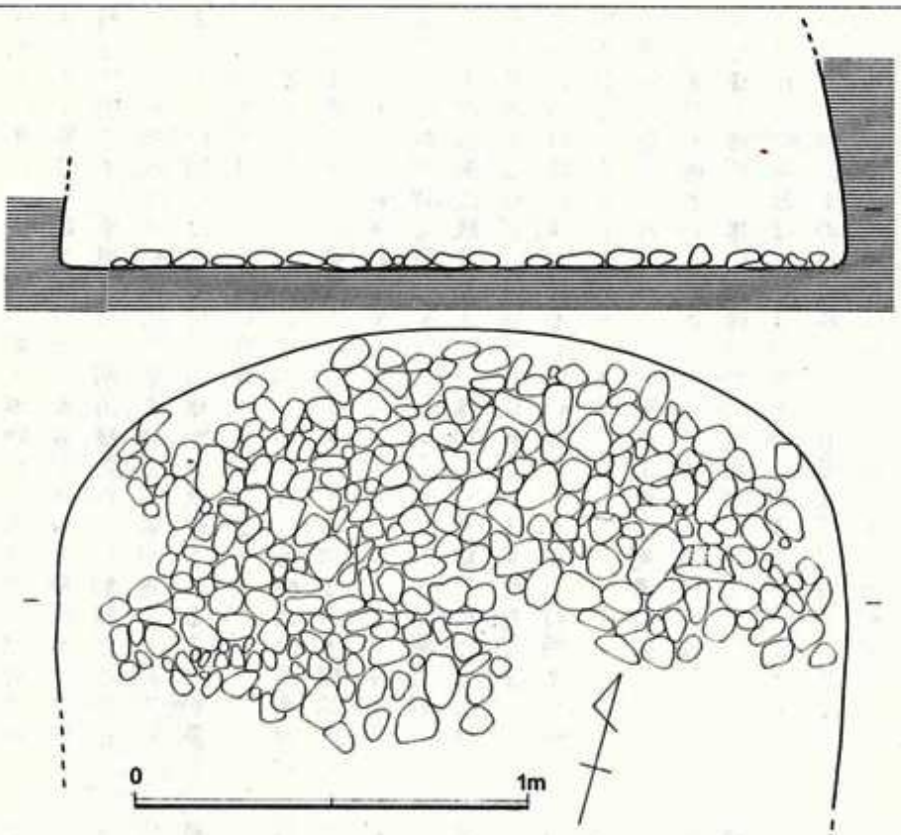
作左山横穴墳からの出土品

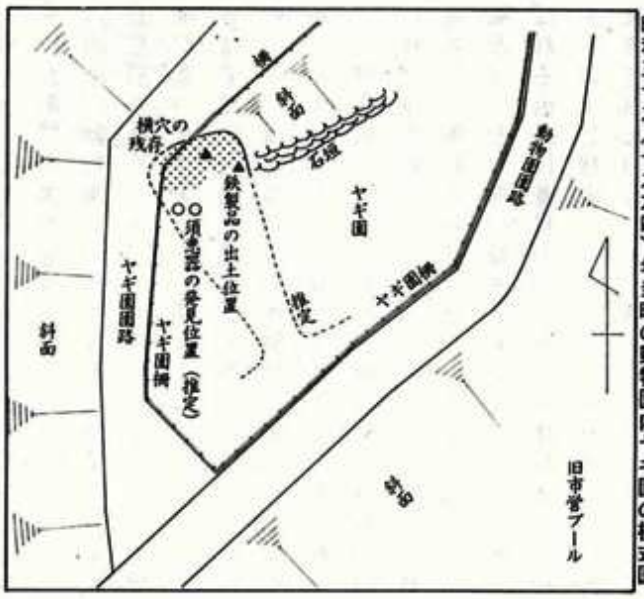
舘山寺町に移転する前、浜松市動物園は作左山にありました。この作左という地名は、家康の三河以来の家臣の一人、本多作左衛門忠次が居住していたことにちなみます。一九六四年、動物園内のヤギ舎を改築するために作左山の斜面を削ったところ、この地域には珍しい古墳時代の横穴墳が見つかりました（図六・写真一一）。

横穴の大半はすでに失われていましたが、奥の一部には数石が認められ、須恵器のほか鉄製品も確認されました。この詳細は一九七六年、『森町考古』一〇号に報告されています。横穴内で検出された古墳時代の遺物のほかに、後世に横穴墳が陥没した凹みにかなりの年代が経過した後、流入した陶器も発見されています（図七）。

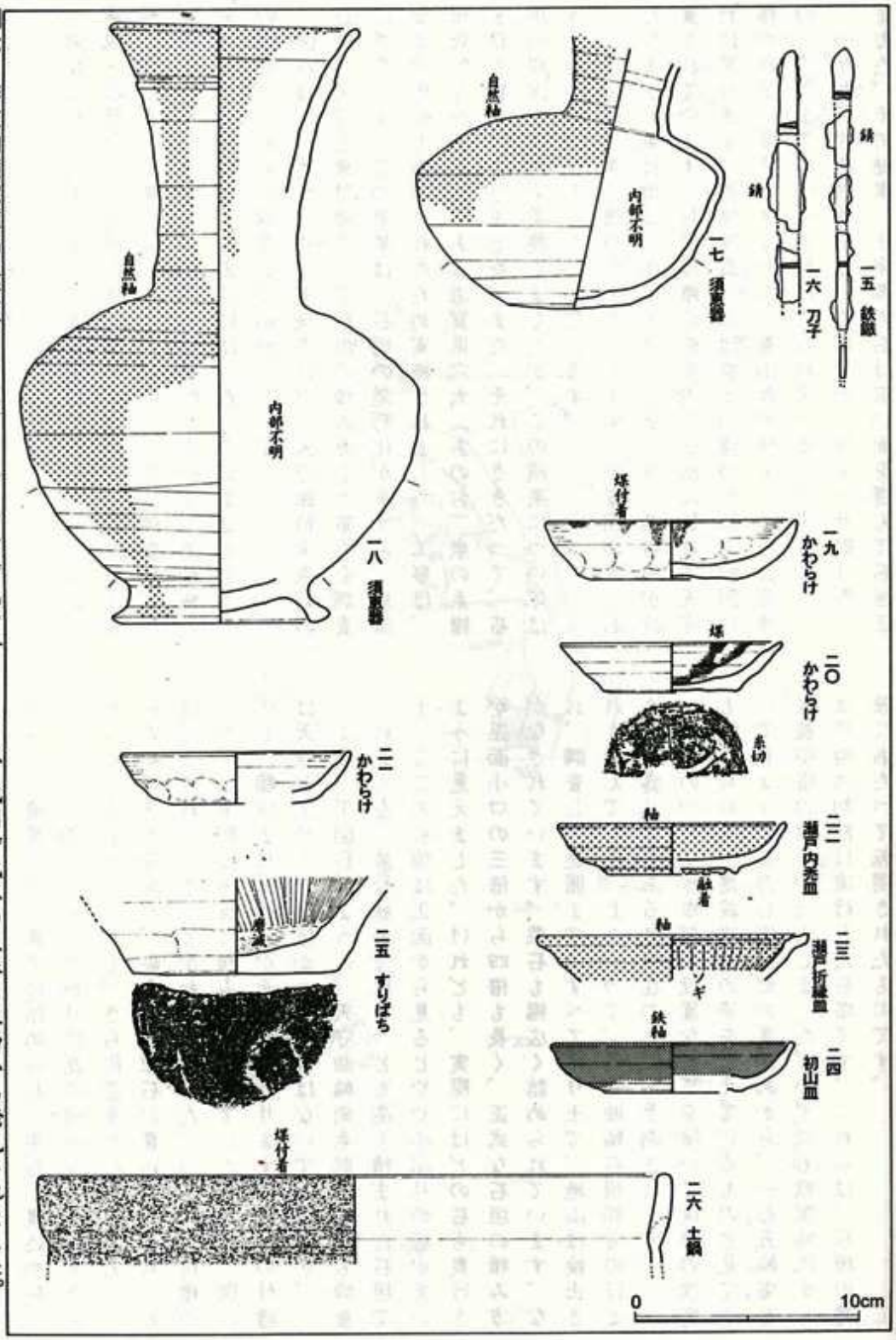
これらの陶器は、七六年の報告当時すでに、この地の作左山と呼ばれる由縁に着目し、「徳川家康による浜松城築城ごろのもの」と推定しています。一九や二一のかわらけは、東照宮出土のものと形態が異なります。二二や二三は瀬戸か美濃産の陶器、二五は常滑焼のすり鉢の破片です。二四は、細江町にあった初山窯産の陶器片です。これらの年代は、十六世紀後半と見られ、作左曲輪の整備（天正年間）と合致します。また、二六の土鍋は採集された破片の中に「耳」（把手）が見られず、この時期において、耳の無い土鍋が三河によく見られる型式であることも、示唆的なところです。

図六　作左山横穴墳の調査記録　旧動物園内ヤギ舎で、古墳時代の横穴墳が発見されました。





昭和三十九（一九六四）年当時の動物園内ヤギ園の横式図



図七　作左山横穴墳出土資料　横穴内出土の古墳時代資料とともに、戦国時代末の土器も上層から発見されました。

工事立会調査の記録

浜松城跡のうち、本丸や天守曲輪では、市役所などの建設・改築や、浜松城公園の整備事業のための工事が実施されると、工事に立ち会って一部の石垣の調査などが実施されています。いずれも部分的なもので、浜松城の全体像を明らかにするまでにはいたっていませんが、この機会にそれらの概要をご紹介いたします。

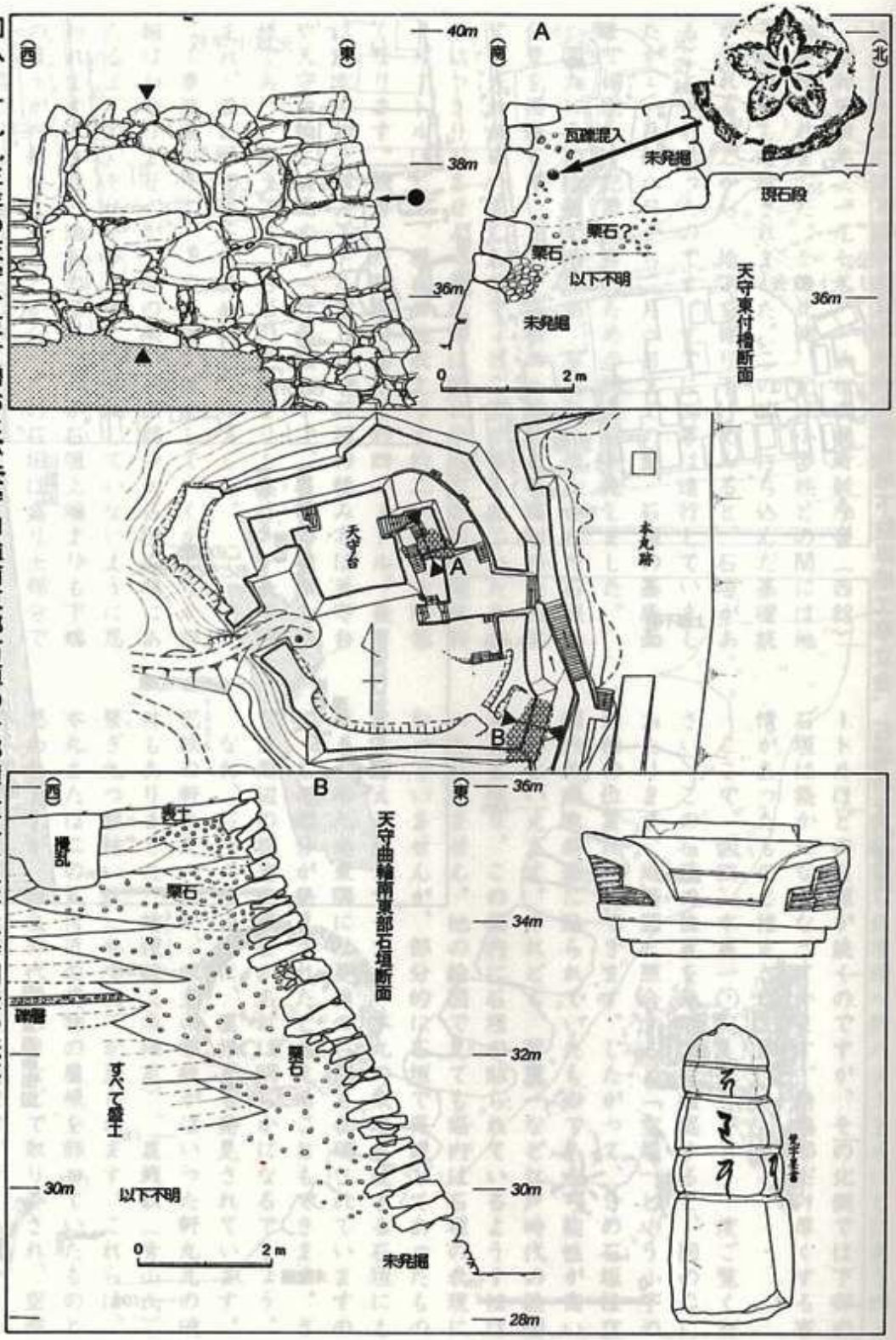
図八は、一九九三年に実施された、天守曲輪南東部の石垣と天守台東付櫓（つけやぐら）の一部石垣の積み直し工事立会調査の成果です。この事業は、石垣の老朽化がすすみ、崩落などの危険も指摘されたため実施されました。工事は、伝統的な技術集団である滋賀県穴太（あのお）衆の系譜をひく業者によりました。また、それにさきだって、石垣の現況の測量も実施しましたが、この成果については後日別の機会をもちたいと思います。

上の図は、東付櫓の成果を示します。位置図のAにあたります。東付櫓は、現在天守台に続く唯一の石段が設置されています。石段は櫓の範囲内で三回に折れて天守台に至ります。巻頭写真にも現在と同様の形状で絵図に描かれています。すなわち、青山氏が城主のころ（元禄（げんろく）のころ）までには今の形に作られているのです。

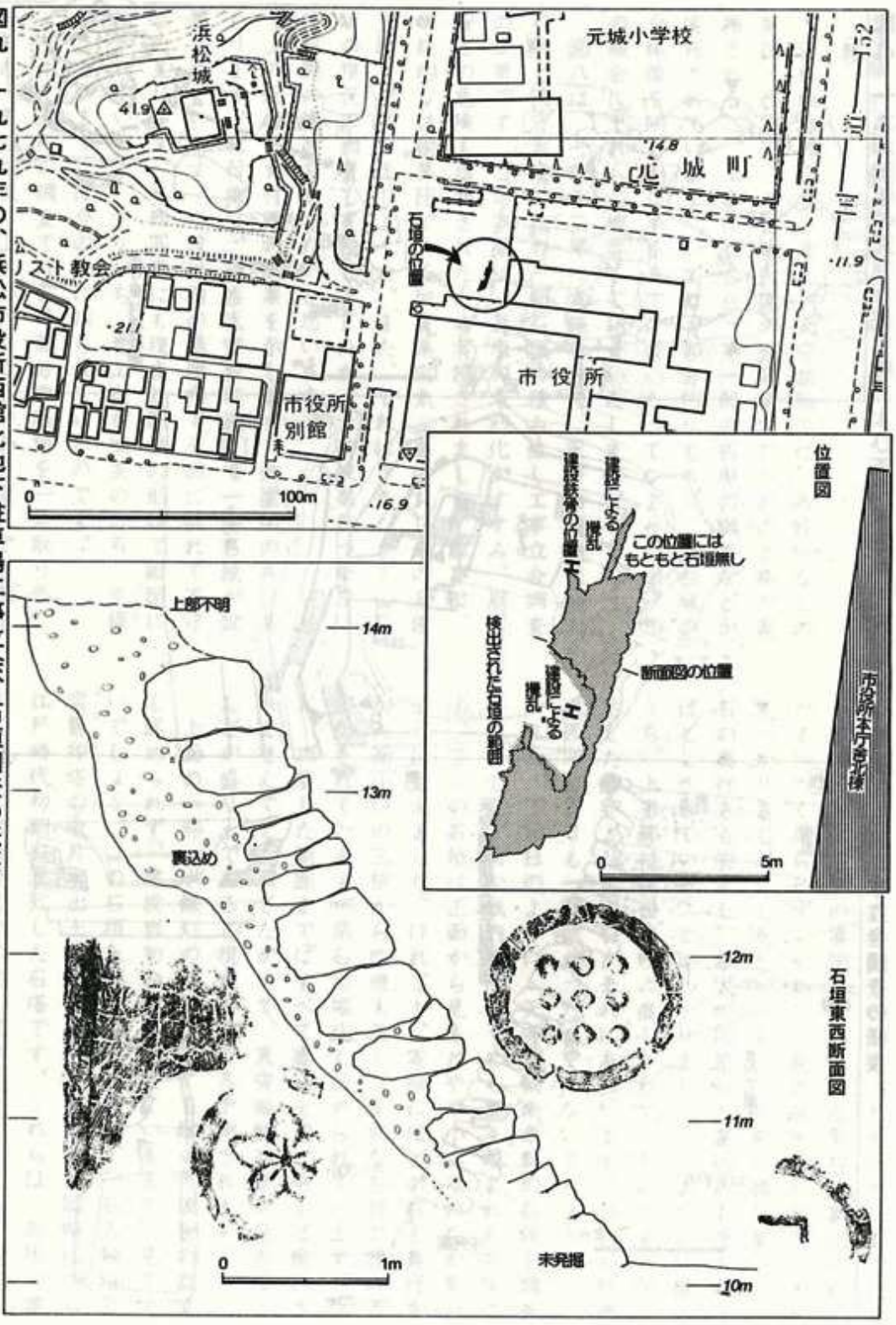
一九九三年の調査ではこの部分の石垣を一旦取り外しました。その結果、上半部の石は広い面を選んで石垣正面に向けているため奥行きが無いことがわかりました。さらに、通常石垣の裏側に詰められる栗石（裏込め石）がまったく見られず、かわりに瓦の破片などがたくさん見つかりました。しかし、さらに下半部に掘り進むと、石の奥行きも安定し、拳大の川原石の裏込めもきちんとほどこされていることがわかりました。つまり、付櫓のうち、上半部は後世に積み直しされていたのです。図に示した●印より上の石がそれにあたります。当初の付櫓は天守台よりも一段低かったのではないでしょうか。

また、下図Bのように、天守曲輪南東部の石垣も調査されました。浜松城内ではもっとも高く積まれた石垣です。ここの石垣は正面から見るとやや小ぶりの石が多いように見えました。けれども、実際にはどの石も奥行きが正面小口の三倍から四倍も長く、正式な石垣の積み方がなされています。栗石も幅広く詰められています。なお、調査した範囲まではすべて盛り土で、地山は検出されませんでした。したがって、天守曲輪石垣部分のほとんどが盛り土であると現在のところ予測されます。

上面の一部（水銀灯の設置など）を除いて後世の改変も認められず、建設当初の姿を伝えているものと見てよいでしょう。この石垣上部の裏込めから、一石五輪塔（いっせきごりんとう）と宝篋印塔（ほうきょういんとう）の破片が出土しました。いずれも戦国時代から江戸時代初期に流行した石塔です。これらは、石垣の建設にあたって転用されたものです。



図八　一九九三年の天守台東付櫓および天守曲輪南東部石垣の一部積み直し工事立会調査の概要



図九　一九七九年の、浜松市役所西館北地下駐車場工事立会、石垣調査の概要

一九七九年の地下駐車場工事発見の石垣

昭和五四年（一九七九）、浜松市役所新庁舎（西館）が建設されました。その北側、元城小学校との間には地下駐車場も建設されました。この時、打ち込んだ基礎杭がずれることから、地下を掘り下げてみると、石垣があることがわかったのです。すでに工事は進行していましたが、一月一八日から二月八日までの間、石垣の基底面まで掘削して記録保存のための調査を実施しました。

図九にその位置と略図を、写真二に検出された石垣の全景を掲載しています。石垣の上部は工事掘削のためすでに失われていましたので、どこまで積まれていたものかはっきりしません。基底部は図に示したとおり海抜約十メートルほどで、現在の地表よりも約二メートルは低くなります。残存した石垣の高さは約四メートル、長さは南北に約十二メートルでした。石垣の積み方は天守台や天守曲輪と共通する「野面積み」で、石材の種類も同様であったようです。石垣の正面よりも奥行きが長く積まれ、裏込めの栗石も詰められていました。

工事範囲以外に、この石垣が連続していくかどうか詳細はわかりませんが、図の南の法面部分が石垣の端にあたるようで、それよりも南には連続していないように思われます。また、法面の傾斜方向が石垣上端よりも下端のほうが内側になることから、この石垣は盛り土部分でなく堀の斜面に貼られたものとわかります。

また、南端から北方向へ約八メートルほどは高さ四メートルほどの石垣が続くのですが、その北側では下部の石垣は築かれなくなっています。南端部だけ厚くする事情があったものと推定されます。

ここで、図四（本書一〇ページ）をもう一度ご覧ください。この石垣の位置を地形図で確認すると、図のCにあたります。地籍図と照合すると「空堀」という小字の南西の位置に想定できます。したがって、この石垣は空堀内の南東斜面に貼られていたものである可能性が高いものといえます。けれども、写真一など江戸時代の絵図を見る限り、この堀内に石垣の貼られているようすははっきりしません。他の絵図で見ても堀内は石垣の表現になっていませんが、部分的に石垣で保護してあったものとも考えられます。また、本丸の東端を境する石垣にも近く、本丸南東隅には菱櫓の石垣も表現されていますので、この部分が発見されたと考えることもできます。さらに周辺の調査の機会があれば明らかになるでしょう。

なお、石垣の検出中に、屋根瓦も発見されています。巴紋の軒丸瓦のほか、城主の家紋がはいった軒丸瓦の破片もありました。桔梗紋（未確定）、裏銭紋（青山氏）、繁ぎ九つ目結い紋（本庄氏）が見られます。これらは、本丸または二の丸付近の建物の屋根を飾っていたものと思われますが、城主の代替わりなどで取り外され、空堀の中に廃棄されたものと考えられます。

一九八四年の天守曲輪外周下工事の立会

一九八四年には、浜松城公園の電線地中化工事が計画され、天守曲輪の周囲や天守台下の一部などについて立会調査を実施しました。この記録は『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』という小冊子にまとめられていますが、配布部数もわずかであったため、ここで改めてご紹介することにいたします。

この工事は天守曲輪の石垣下の各所に一メートル四方のハンドホールを掘削し、それぞれのハンドホールの間を幅四〇センチメートルほどの帯状に掘削して接続し、電線を埋設するというものでした。したがって、各所とも幅が狭く、埋没している遺構の全体像を把握するのは困難でしたが、天守曲輪周辺の南東部から北西部まで、広い範囲の外周を調査する機会をとなりました。その結果、いくつかの重要な知見を得ることもできました。図一〇にその概要をまとめてあります。

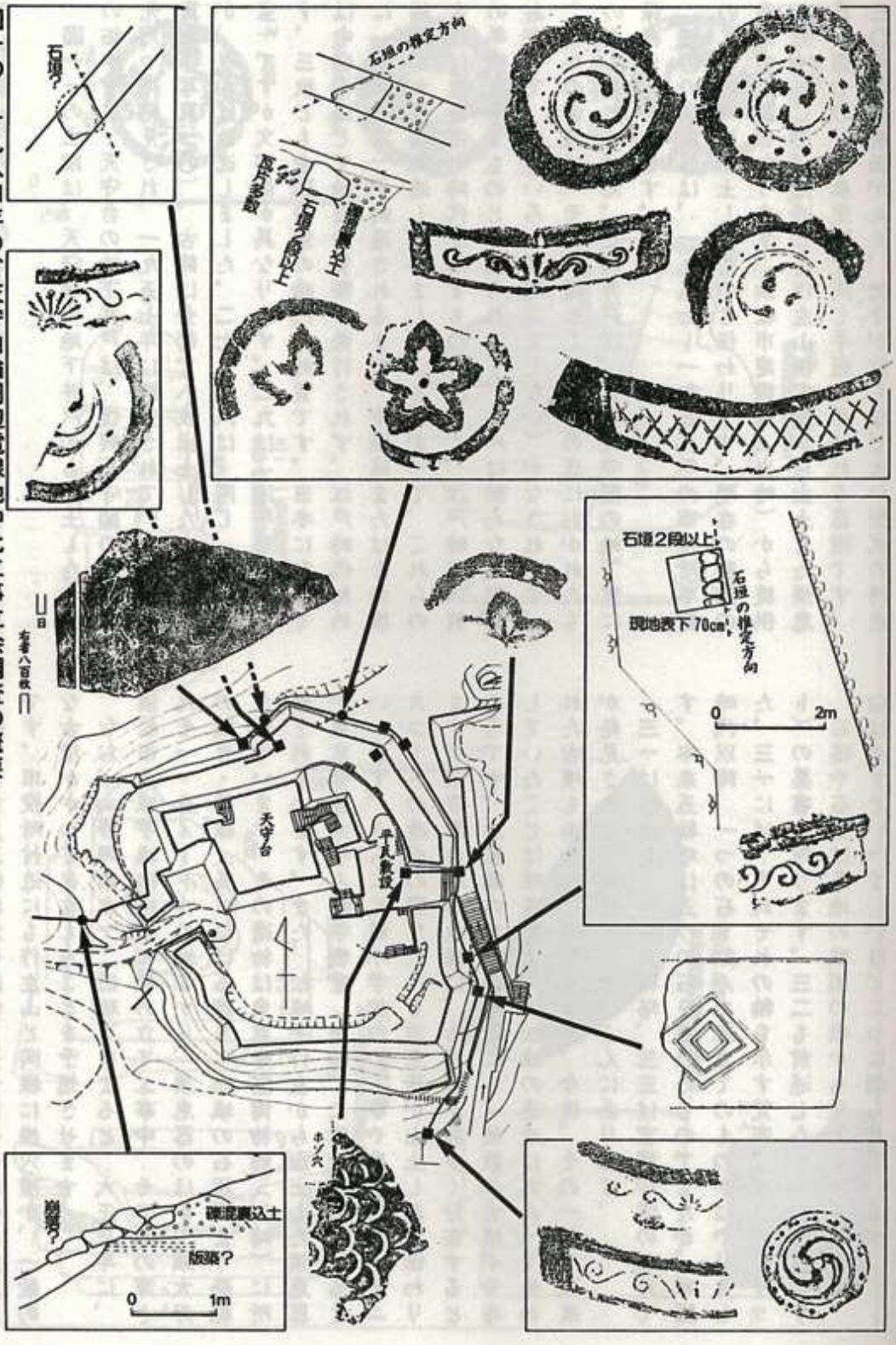
まず、現在の地表面では確認できない位置に、石垣が発見されています。このうち西側の埋門下で検出した石垣は、上部の石が崩落した状態を示していました。現在天守曲輪の北西隅には石垣が存在しませんが、江戸時代の絵図では石垣が表現されています。かつてはこの部分にも天守曲輪石垣が連続していたのですが、いずれかの時点で崩落して失われたと考えるのが自然です。

天守曲輪北部下の石垣は二段以上ありましたが、工事の都合でそれ以上は掘り下げませんでした。この付近北側の斜面の方向に沿い、富士見櫓の方向に連続するように見えます。本来、この斜面にも石垣があったのでしょうか。また、石垣の前面に大量の瓦が廃棄されていたのも特色です。瓦には巴紋の古式のものと同時に太田氏の代を示す桔梗紋の軒丸瓦も見られます。すなわち、この石垣が埋没したのは、太田氏以後の城主の代であることがわかるのです。十七世紀末以降のこととなります。

天守曲輪南東部下でも二段以上の石垣が検出されました（写真一二）。現在の天守曲輪石垣の方向とは若干異なります。また、石の大きさ、奥行きの無さから判断して、あまり高い石垣にはならないものと思われます。出土した軒平瓦の破片も戦国時代にさかのぼるものと推定され、かなり古い時代の石垣である可能性があります。

このほか、そのすぐ南の地中からは半分に割られた石臼（茶白の上臼）が出土しています。

天守門付近では、現地表下約五〇センチメートルの地中から平瓦を並べて敷設した跡が検出されました（写真一三）。排水施設か暗渠（あんきょ）のようなものと思われますが、詳細は不明です。天守門は当時よりも若干埋め立てられている可能性があり、正式に発掘すれば、礎石などを検出できる期待も残されています。この位置からは鯱瓦（しゃちがわら）の破片も出土しています。天守門を飾っていた鯱瓦の一部と考えることもできますが、確実ではありません。



図一〇　一九八四年の、天守曲輪周辺電線地中化工事立会調査の概要

浜松城跡からの出土品

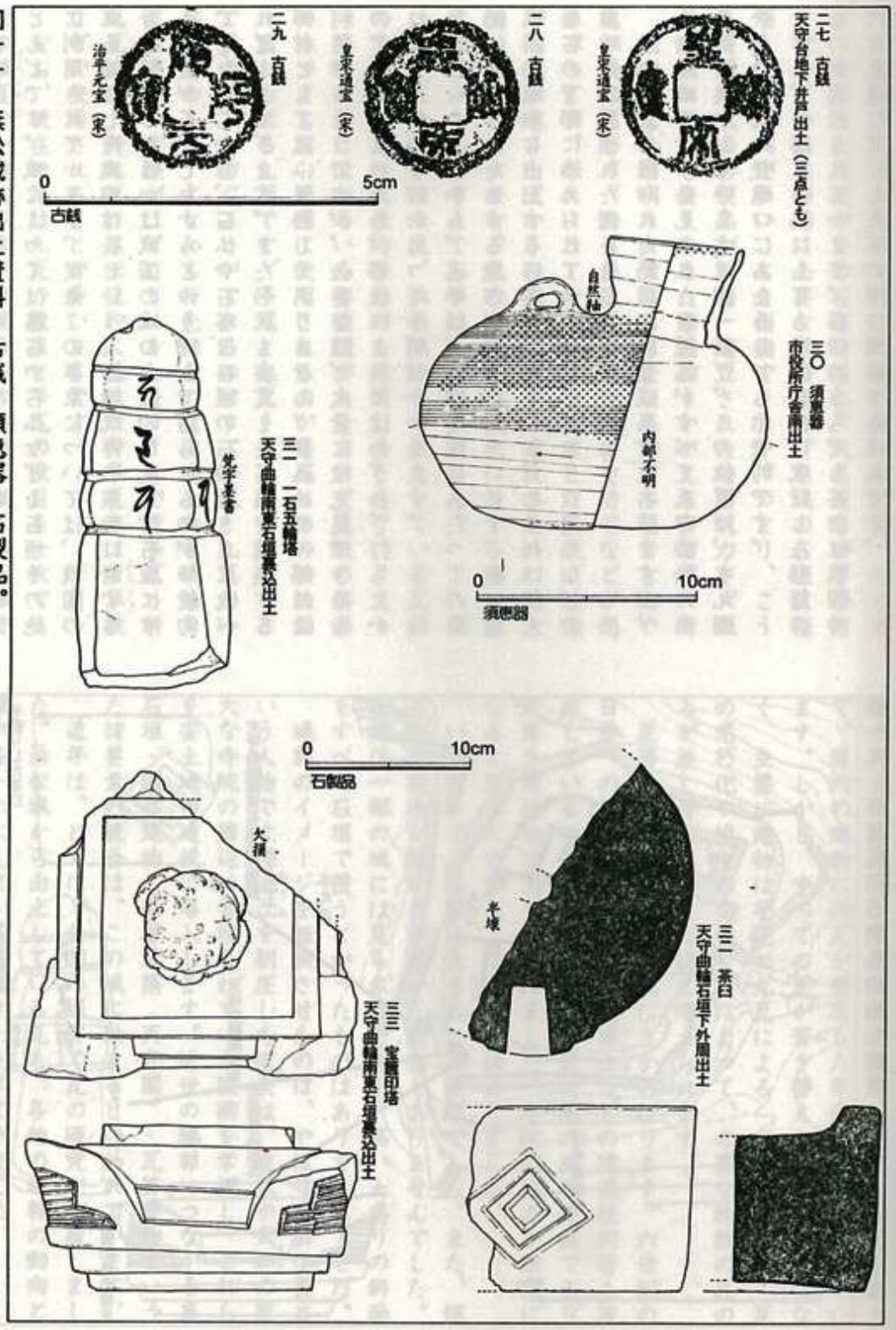
図一一の上段は、天守台の地下井戸から出土した古銭の拓本です。天守台の地下井戸は、復興天守閣の建設に先だって発見され、一九五七年に調査されています（写真九・写真一〇）。古銭は全部で八枚出土したようですが、現在は散逸しました。二七と二八は、同じ「皇宋通宝」ですが文字体が異なります。二九は「治平元宝」です。三枚とも中国の宋の時代の銭貨です。日本においては中世を通じて独自の貨幣が発行されず、江戸時代初めに「寛永通宝」が鋳造されるまで、中国銭またはその模鋳銭が大量に流通していました。したがって、これらの古銭は直接宋の時代を示すものではなく、江戸時代以前の年代を示すものと考えられます。井戸は新たな掘削にあたって、いろいろな祭祀（まじない）がなされます。これらの古銭は、その一環として井戸の底におかれたものかもしれません。この井戸は、復興天守閣の地下室に保存されています。

三〇の須恵器は、一九五七～一九五八年の市役所本館の工事の時に出土したものと伝わります。現在の西館の南部の位置となります。浜松市建設課（当時）から提供を受けました。先述した作左山横穴墳から出土した須恵器（図七の一七参照）と同じ平瓶と呼ばれる器種です。三〇の方が断面が丸く、把手が付くなど古い型式の特色を残します。三〇は六世紀代、一七は七世紀代の須恵器です。市役所付近にも作左山と同様に横穴墳か、一般的な古墳がかつて存在したことを予想させます。

なお、『静岡県史』（旧版）によると、大正三年に、浜松市元城字城内中堀の埋め立て工事中、その南の深さ凡そ一・五メートルの地中から、須恵器のほか円頭大刀の破片・雲珠（馬につける飾り）が城の石垣下より発掘されています。その遺物は東京帝室博物館（当時）に所蔵されています。また、松城字作左から出土した須恵器が東京帝国大学人類学教室（当時）に所蔵されているといいます。さらに元城小学校内の工事や鹿谷町の旧テニスコートの造成の際などにも須恵器が出土したと伝わります。三方原台地の東縁は、古墳群が数多く分布するところです。浜松城内やその周辺にも、複数の古墳が分布していたことは確実です。浜松城の造成にあたって失われた古墳もあったことでしょう。今後、その一部や残痕が発見される可能性もじゅうぶんにあります。

三一は前述した一石五輪塔、三三は宝篋印塔の破片です。本来五輪塔は五つの石を重ねたものでしたが、戦国時代以降、一つの石を刻んだ仕立てのものがはやりました。三一には、それぞれの輪を示す梵字（サンスクリット）の墨書が残ります。三二も前述した石臼の破片です。

石塔や石臼は各地の戦国の城から発見されています。臼は必ずといっていいほど二つに割られています。



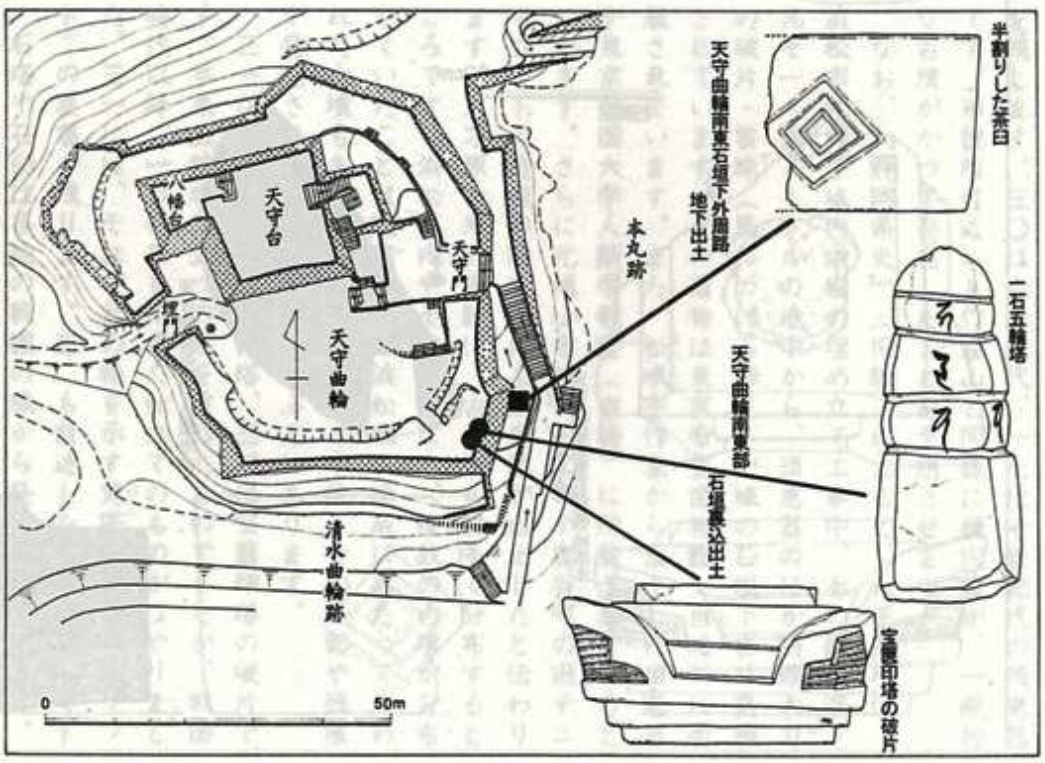
図一一　浜松城跡出土資料　古銭・須恵器・石製品。

石塔は、先祖の供養などのために建てられたものがほとんどです。城によっては墓石や石仏なども石垣その他に利用されています。従来この事象については、戦国の城を確立した織田信長という人物の既存の宗教に対する否定観や、あるいは戦国の城の全国的な乱立で石垣にする石材が不足したからという理由で語られるのが一般的でした。しかし、石仏や石塔は石垣の石の大きさに比べれば小さすぎます。また形状も安定した石垣を構築する部材としてはふさわしくありません。裏込めの一部には利用できそうですが、必要なほど大量には充足できるものではありませんし、部位によってはわざわざ打ち欠かねばならないなどかえって手間がかかります。

これらのことから、近年は、城郭建設にあたっての祭祀に使用されたとする見方が注目されています。各地の戦国の城から出土する石塔を観察すると、とりわけ巨大な石の下部に添えられていたり、城の入り口近くなどの要所に配置された例を見ることができます。

今のところ限られた範囲の調査成果ではありますが、浜松城城では、発見された石製品がすべて天守曲輪の南東部に集中しています（図一二）。この位置は、本丸側からの正規の登城口にあたることも示唆的です。

また、石塔・石仏にしても戦国時代に流行した形態のものが選択されています。石白のうちでも茶白は戦国時代に急速に流行した茶の湯に関連する道具です。



図一二　祭祀転用石製品の出土位置

したがって、きわめて同時代性の強い石製品、たとえば、建立されたばかりの石塔や石仏、大名たちがさかんに行っていた茶の湯に必要な茶臼など、を城の石垣に転用している例が多いことを指摘できます。つまり、こうした同時代の石製品が製作・建立された時の呪力を、城の建設に転用しようとした意図がうかがえるのです。

呪力の意味は明らかではありませんが、不穏なものや敵の侵入を防ぐ、あるいは石垣が孕むのを防ぐなどが想像できます。それにしても、石塔を建立した民衆にしてみれば、建てたばかりの供養塔を城の建設のために引き抜かれるのですから、城の建設者の民衆に対する強い態度はじゅうぶん考えてみなければなりません。

図一三・図一四には、浜松城跡から出土している瓦類のうち軒丸瓦の代表的なものを掲載しました。

屋根の瓦にはいろいろな種類があります。屋根の斜面のもっとも広い範囲に使用されるのが平瓦とその接続面に重ねられる丸瓦です。平瓦と丸瓦を交互に重ねることで雨の侵入を防ぐことができるのです。平瓦・丸瓦の一番手前のもの、すなわち軒先のものには地上から眺められる方向に文様がほどこされました。これが軒平瓦と軒丸瓦です。軒丸瓦には伝統的に巴紋、軒平瓦には唐草紋などが使用されることが多いようです。

なお、現在の瓦は丸瓦の役目と平瓦の役目を一枚でこなす桟瓦が一般的です。静岡県内の城郭では、掛川城や横須賀城の軒桟瓦に江戸時代後期の城主の家紋瓦があって、城内の建物に桟瓦が普及した年代が確かめられています。しかし、すべての瓦が葺き替えられたわけではなく、主要に建物は平瓦と丸瓦による「本瓦葺き」で、瓦の老朽化や城主の交替などによって、必要な枚数の瓦のみが差し替えられただけと考えられます。

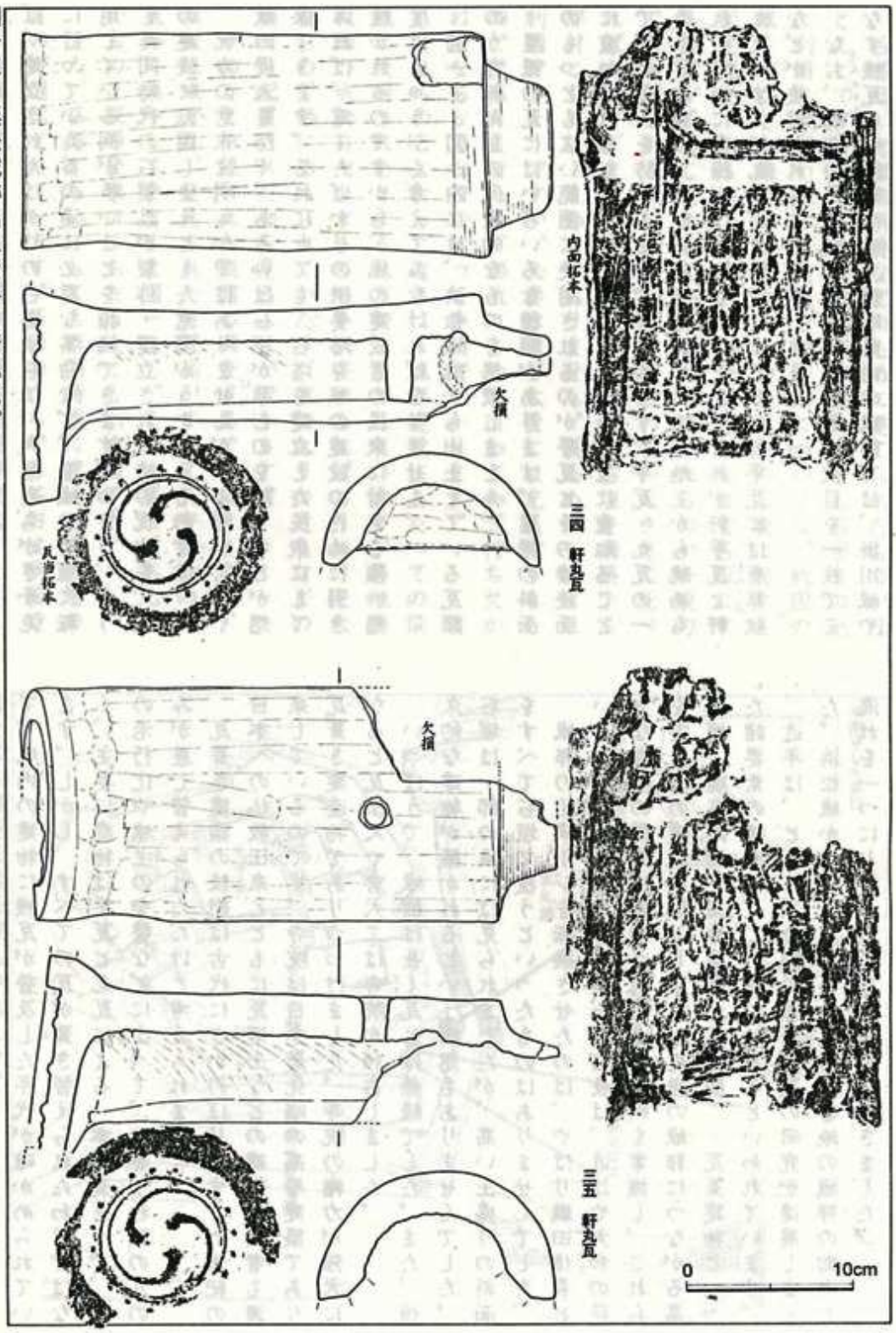
瓦葺き建築の技術は古代にさかのぼります。六世紀の日本への仏教伝来とともに瓦博士などの建築技術者も渡来しているのです。寺院は日本最先端の高層建築であり瓦葺き建造物でありつづけました。寺院の権力が強大になると瓦工人や宮大工は寺院が独占しました。

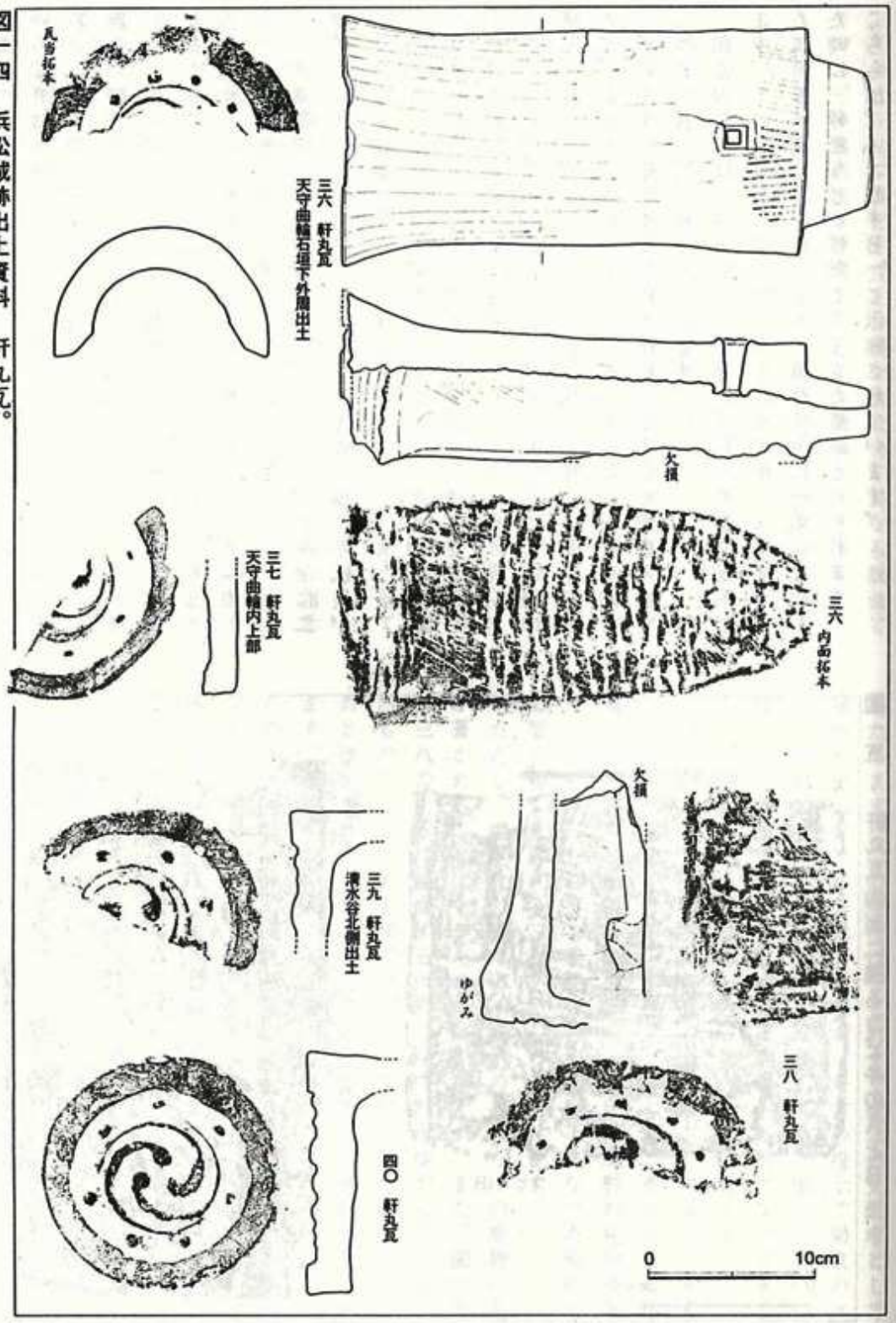
いっぽうで、城郭は長く瓦とは無縁でした。また、恒久的な建物が築かれるという構想もありませんでした。石垣は一部の城には見られましたが、高い土盛りの斜面をすべて石垣で覆うといったものはありませんでした。

城郭のイメージを転換させたのは、やはり織田信長という人物です。近江を制圧した信長は、近江や大和の巨大な寺院の周辺に蓄積されていた技術を掌握し、これらを安土城の建設に導入します。近世の城郭につながる高石垣・礎石建物・高層建築（天守閣）・瓦葺建物といった諸要素の統合は、この城に始まるといわれています。

近年は、とくに、全国の城郭で瓦の研究が進展しました。浜松城から出土している瓦も、各地の城郭の動向と流れを一つにしていることがわかってきました。

図一三　浜松城跡出土資料　軒丸瓦。





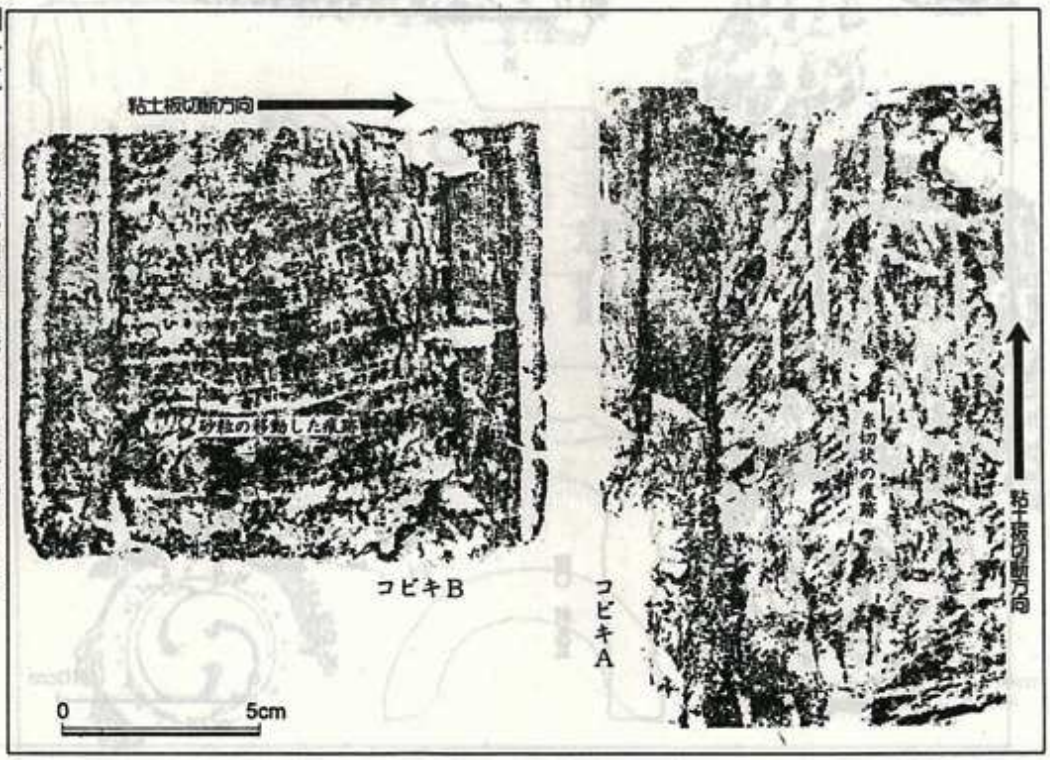
図一四　浜松城跡出土資料　軒丸瓦。

丸瓦の内面（雨が当たらない側）には、とりわけいろいろな痕跡が残っています。瓦の調整の時に巻きつけてあった縄や網の痕（あと）なども見ることができます。これらも新しい時代の瓦では見られなく傾向があります。このほかに、網の間をさらによく観察すると、細かく同一方向に連なる筋が見つかることがあります。これは、粘土の固まりから瓦一枚分の粘土を切り離す時についた「コビキ」と呼ばれる技法の痕跡といわれています。

『摂津高槻城』の報告書以来、このコビキの手法に二種類があることが確認され、しかもその二種に年代差があることも追認されてきました。

図一五に、浜松城の軒丸瓦に見られるコビキの二種類を拓本で例示しました。図右の瓦の内面には、左下から右上にかけて斜め方向に連続するいく筋もの痕が見られます。これは陶器の底にもよく残る「糸切り」と同様の痕跡です。粘土を切断する時に、両手で持った糸状のもので、瓦と同方向に手前に引き切った時についた痕跡といわれます。緩（ゆる）やかな弧線の連続になるのが特色です。「コビキA」と仮称されています。

図左の瓦には、横方向にやや強い平行した筋が見られます。これは針金などを軸木などに強く張って固定させた工具を使用して、粘土を瓦と直交方向に一気に切断した時に、砂粒などが移動してできた痕跡といわれます。こちらは、「コビキB」と仮称されています。



図一五　軒丸瓦内面に残るコビキのAとB

このように、コビキAとコビキBは全く異なる技法です。コビキBのほうが切断の効率を向上させた進歩した工法であることは明らかです。近畿地方の城郭においては、天正後半期～文禄年間のうちにコビキAからBに変化することが指摘されています。豊臣秀吉が天下人として権勢をふるっていたころにあたります。

静岡県下の城郭でも、この時期に城郭の大変革が認められますが、コビキAの瓦が導入されており、県下の城郭にコビキBが認められるのは次の変革期となる正保年間（一六四四～一六四八）であるだろうと『久野城Ⅳ』などで想定されています。

この背景には、近江で織田信長によって組織された瓦工人（この工人は、信長の没後、後継者となった秀吉の甥で近江を領有した羽柴秀次に掌握されたと推定されています）や播磨で豊臣秀吉によって組織された瓦工人たちが、城郭建築の戦略的展開によって、彼ら大名の指示で各地へ移動したことが予測されているのです。

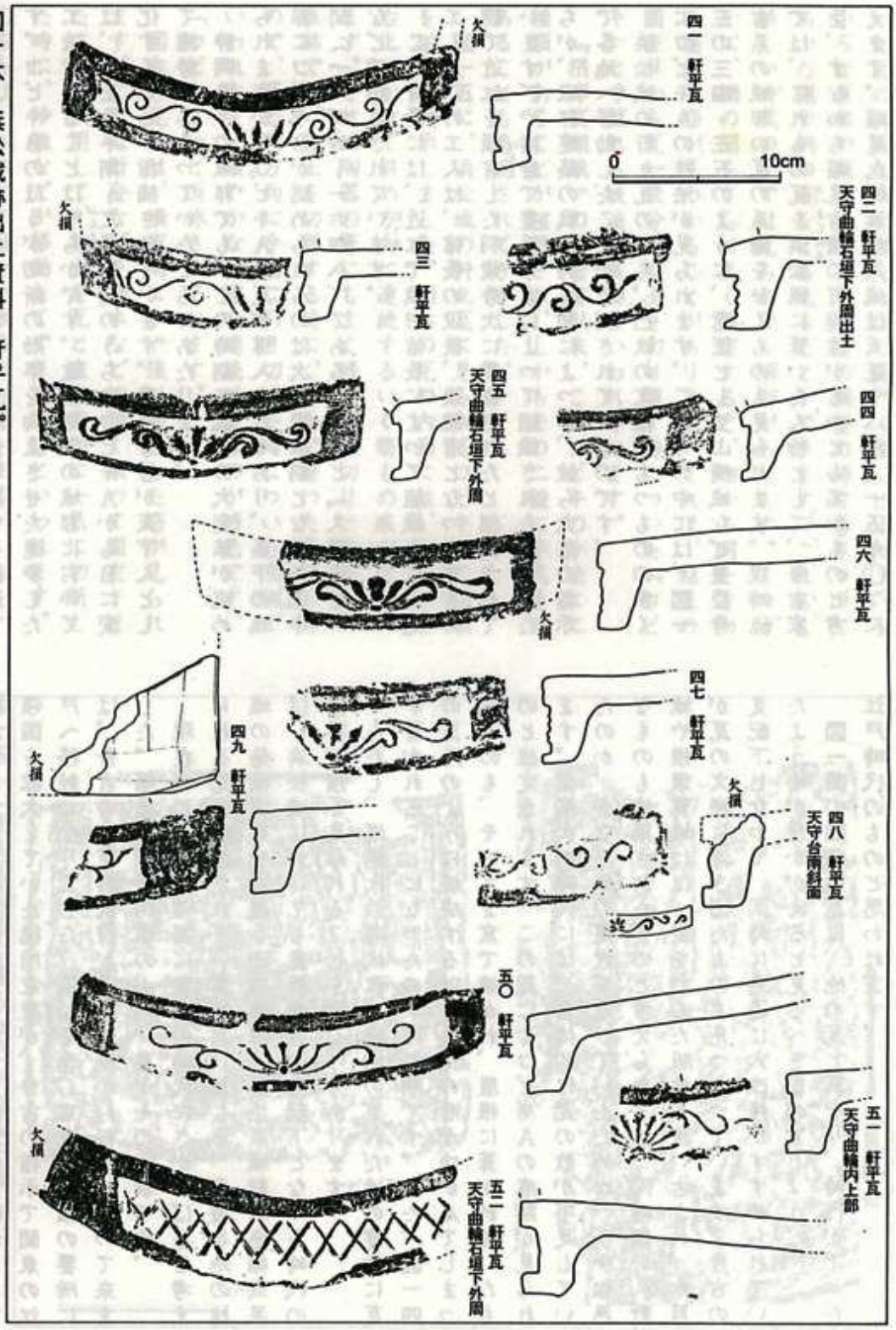
浜松城の軒丸瓦のうち、巴紋の文様をもつものの多くにコビキAの技法が見られます。これらの中には、図一三の三四・三五のように、意匠として山崎城など豊臣秀吉系の城郭の瓦の系譜をひくものも見られます。現時点では、これらの瓦を浜松城に葺いた人物として、秀吉家臣、すなわち堀尾吉晴の可能性がもっとも高いものと考えます。堀尾氏の浜松入城は天正十八年（一五九〇）にあたります。この年には、これまで遠江の支配者として領国を拡大していた徳川家康が、秀吉の指示で関東の江戸へ移封となりました。浜松を含む家康の旧領の要所には、秀吉の配下の武将が近江各地から転封となって来ました。堀尾氏や掛川城の山内一豊がその代表です。

現在のところ、確実に家康の時代にさかのぼると考えられる瓦は発見されていません。むしろ、東海各地の諸城の発掘成果や近畿各地の織田・豊臣系城郭の発掘成果は、浜松城においても豊臣秀吉の支配下となった時代の影響が強く見られることを示しつつあります。

ただし、堀尾氏の時代に、城内のどれだけの建物に瓦が葺かれることになったのかは不明です。また、図一四の三八のように焼成する以前に瓦の形がゆがんでしまったものも、そのまま窯で焼かれ、屋根に葺かれていたものと推定されます。この瓦にもコビキAの痕跡が見られます。堀尾氏の時代には、全体的に瓦の数が不足していたのか、かなり城の建設を急いでいたためか、多少粗悪なものも使用されたものと考えられます。同時期の久野城や横須賀城には、型を刻んだ版木が使い古され、木目が瓦の文様に浮き出たものも見つかっています。秀吉の支配下となって、同時に急速に大改修がすすめられていたようすがうかがえると見るべきなのでしょう。

図一四の四〇の瓦は、他の瓦と異なり、時代が下った江戸時代のものと思われます。

図一六　浜松城跡出土資料　軒平瓦。



図一六には、軒平瓦の各種をまとめました。現在確認されている軒平瓦の文様はこれですべてです。もちろんこれ以外の文様が今後確認される可能性はあります。

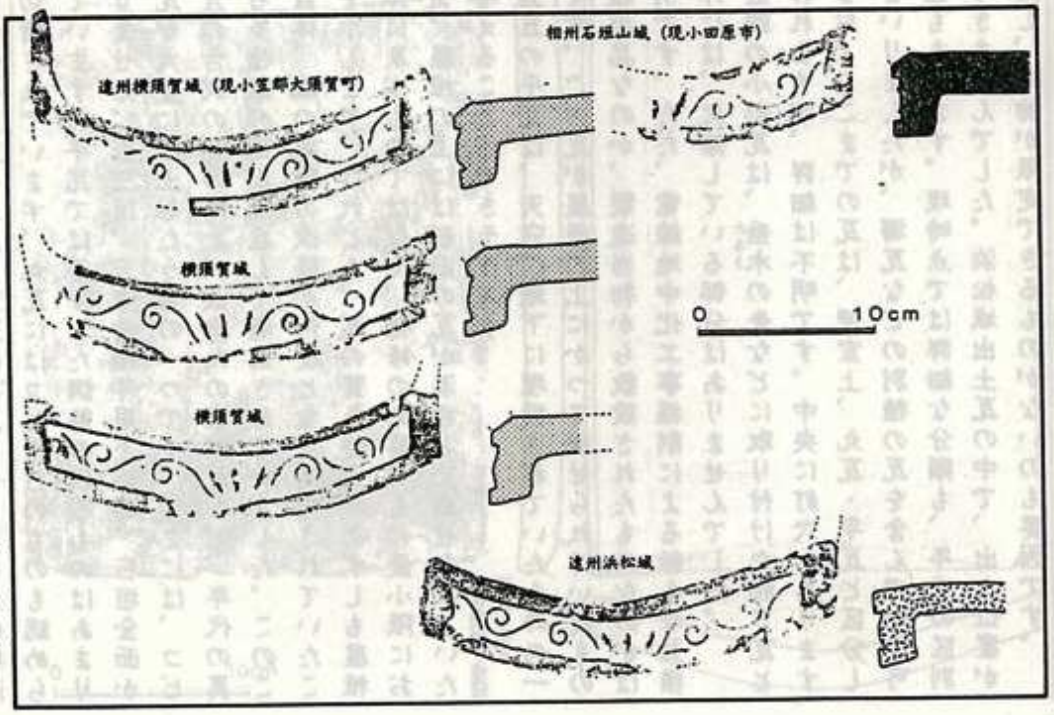
発見されている量でいうなら、四一・四三の型式がもっとも多く発見されています。ついで四四・四五のように、二重唐草になった型式です。これには四六・四七のように意匠の若干異なるものもあります。このほかの個体は出土例が一点ないし数点だけです。

近年、とくに注目された瓦が四一・四三の型式です。この瓦とまったく同じ文様を持つ軒平瓦が横須賀城（静岡県大須賀町）からも発見されています。今のところ確実に同じ版木のものは認められていませんが、文様は酷似しており、同じ型紙から版木を掘ったものと考えられます。つまり、浜松城の瓦と横須賀城の瓦は、同一の瓦工人がほぼ同時期に製作したと推定されるのです。

浜松城と横須賀城において、同一時期の建設や改修が考えられるのは、天正六～九年（一五八〇年前後）の徳川家康とその家臣による普請か、天正十八年の豊臣秀吉"支配下での家臣による改修となります。

ところで、この軒平瓦と同一の系譜にある瓦が、石垣山城（神奈川県小田原市）でも発見されています。石垣山城は、小田原城の後北条氏攻めのため、豊臣秀吉が築いた「対の城」で、天正十八年に築かれ天正十九年まで継続したことがはっきりしています。

参考　酷似する軒平瓦　『浜松城のイメージ』から転載。



この三城の瓦に共通した文様の瓦は、現在までのところ、このほかの全国の城郭において発見された例がありません。それだけに、この三つの城の瓦の共通性が浮かびあがります。この瓦については浜松市博物館発行『浜松城のイメージ』にも掲載いたしました。

仮に、家康が天正六年ころに浜松城・横須賀城に瓦を葺き、天正十八年に石垣山城に葺いたとするなら、この間の十年余りの空白がうまく説明できません。逆に、浜松城のこの種の瓦・横須賀城の瓦とも、石垣山城建設直後の天正十八年に豊臣秀吉の家臣によって葺かれたと考えるほうが自然です。なお、この瓦の祖系と目される瓦が秀吉在城時代の姫路城から出土していることも、その証左となるものと思います。軒平瓦でも、秀吉の家臣、堀尾吉晴の時代が一大画期と考えられるのです。

このほか、図一六の四二・四四・四五などの瓦も堀尾時代の可能性があります。五〇は、秀吉の建設した聚楽第に系譜の近いものがあります。掛川城にも同様の瓦がありますが、浜松城の方が唐草が一反転足りません。

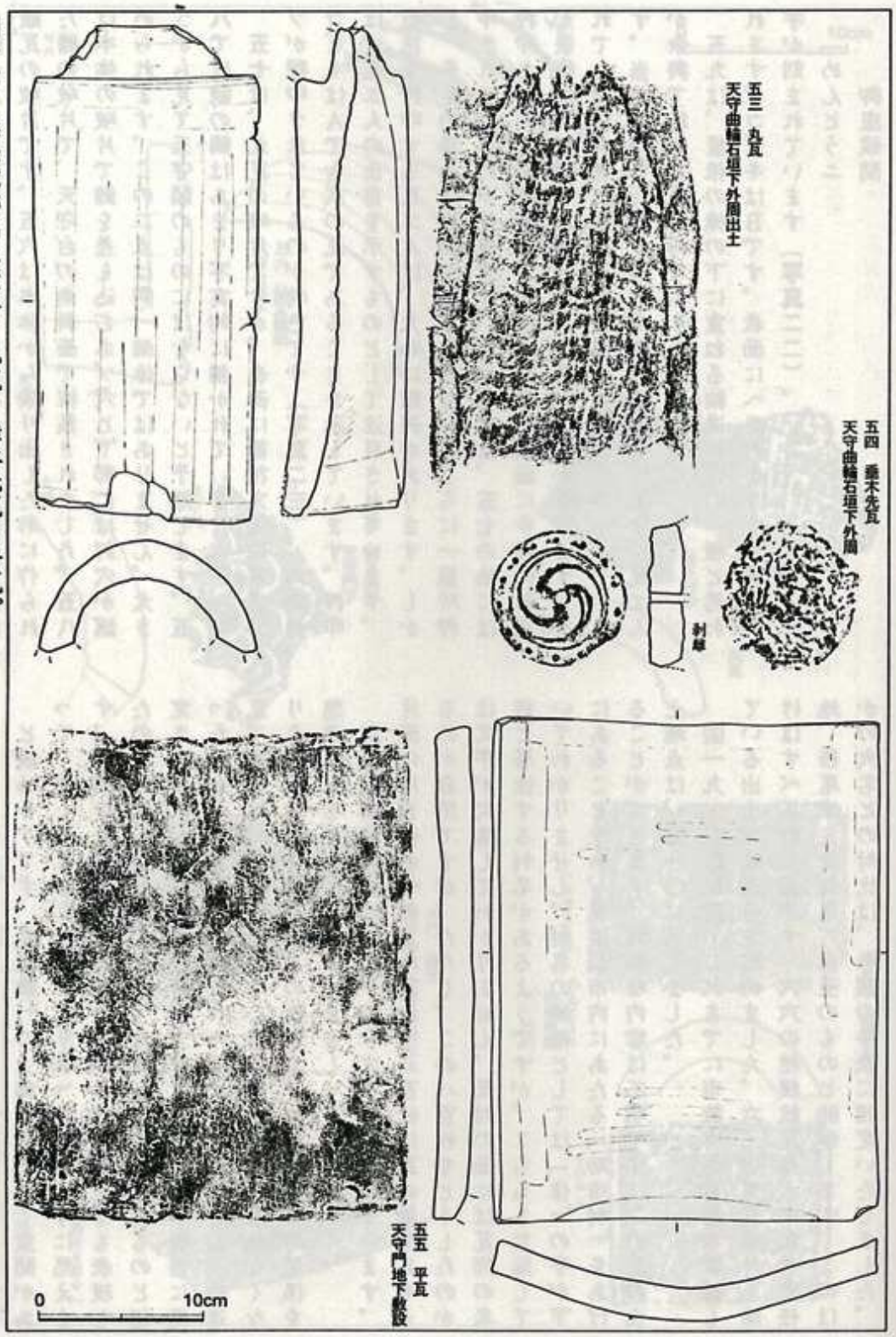
図一六の五二の軒平瓦は、まったく系譜の異なる文様で、全体が格子目状に区画されています。後述するいずれかの家紋が入った軒丸瓦と対になるものと推定されます。軒平瓦の場合は、巴紋の軒丸瓦と対になるもののほかに、各種の家紋瓦と対になる個体を検出しなければなりませんが、この作業はまだ進んでいません。

図一七の五三の丸瓦、五五の平瓦ともコビキAの技法で切断されています。丸瓦にはコビキBのものも認められています。平瓦ではこうした調整の残るものはあまりありません。五三は、天守曲輪外周下北部、石垣全面から瓦が大量に出土したうちの一つです。ここには、コビキAの古式の瓦のほか、太田氏の家紋瓦など、年代の異なる多種類の瓦が混在して廃棄されていました。このこと自体、城の建物の改修が何度となく実施されていたことを示します。けれども、瓦の葺き替えが必ずしも屋根全体に及ぶものではなく、補修の必要なもの最小限におさえ、屋根の上には新旧の瓦が混在して載せられていたと考えることもできそうです。

五五の平瓦は、天守門地下に埋設されていたものの一枚です。この瓦が屋根の上にかつて載せられていたものの転用品なのか、製造当初から敷設されたものなのかは不明です。ただ、電線地中化工事掘削による新たな欠損以外には、欠落している部分はありませんでした。

五四の小形瓦は、垂木の先などに取り付けた飾り瓦と思われますが、詳細は不明です。中央に釘穴があります。

なお、ここまでの瓦は、便宜上、丸瓦・平瓦と区分してまいりましたが、塀瓦などの別種の瓦を含んでいる可能性もあります。現時点では詳細な分類も、年代の区別もできませんでした。浜松城出土瓦の中で、出土位置が確定し、建物が限定できるものがないのも要因です。



図一七　浜松城跡出土資料　丸瓦・垂木先瓦・平瓦。

図一八には、特殊な瓦をまとめました。五六と五八は鯱瓦の破片です。五六は本体から張り出した形に作られた鰭の破片で、天守台の南斜面で採集されました。五八は本体の破片で鰭を差し込むホゾ穴と下部には釘穴が認められます。この二点は同一個体ではありません。大きさから見て天守閣のものにはならないと予想します。五八では鯱の鱗はあまり写実的に描かれていません。

五七は、丸瓦の破片ですが、表面に菊花文様のスタンプが押印されているのが特色です（写真二三）。内面のコビキはAで古式の瓦であることを示しています。押印は、瓦工人の出自を示すものとして注目されています。菊花を押印する瓦工人は、大和に類例があります。しかし、多くの場合は側面など目立たないところに一箇所押印されているのが普通です。浜松城では、五七の他には押印された瓦の例が無く、この個体も表面に多数の菊花が装飾的に押印されているところが気にかかります。それでも菊花の意匠は前述した大和のものに類似しています。当時流行した焼き物の文様にも似ています。瓦工人が余興で細工したものなのかもしれません。

五九は、屋根の棟の下に重ねる輪違い瓦の一種と思われます。コビキはBです。表面にヘラのような工具で文字が刻まれています（写真二二）。

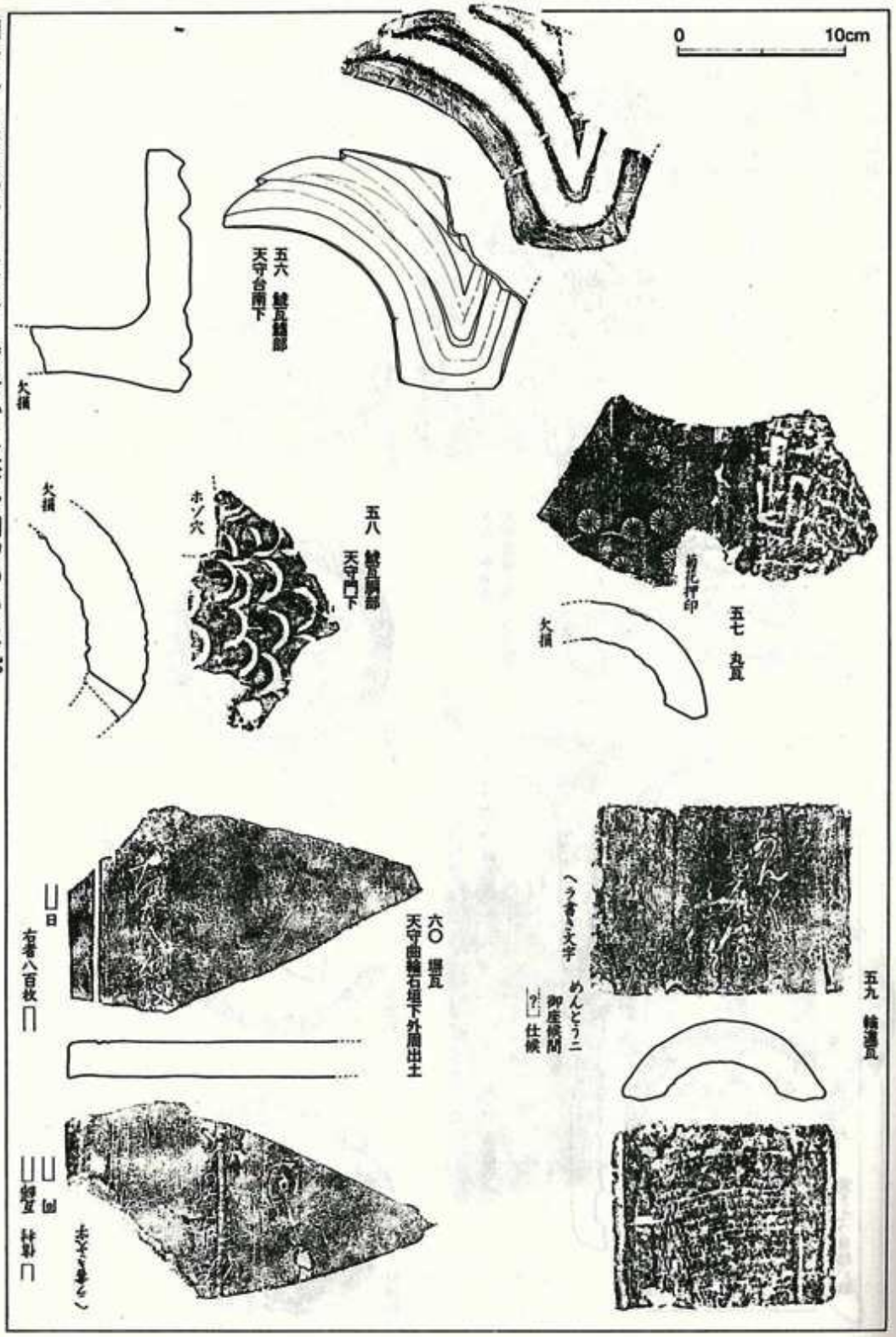
「めんとうニ
　御座候間　　仕候」

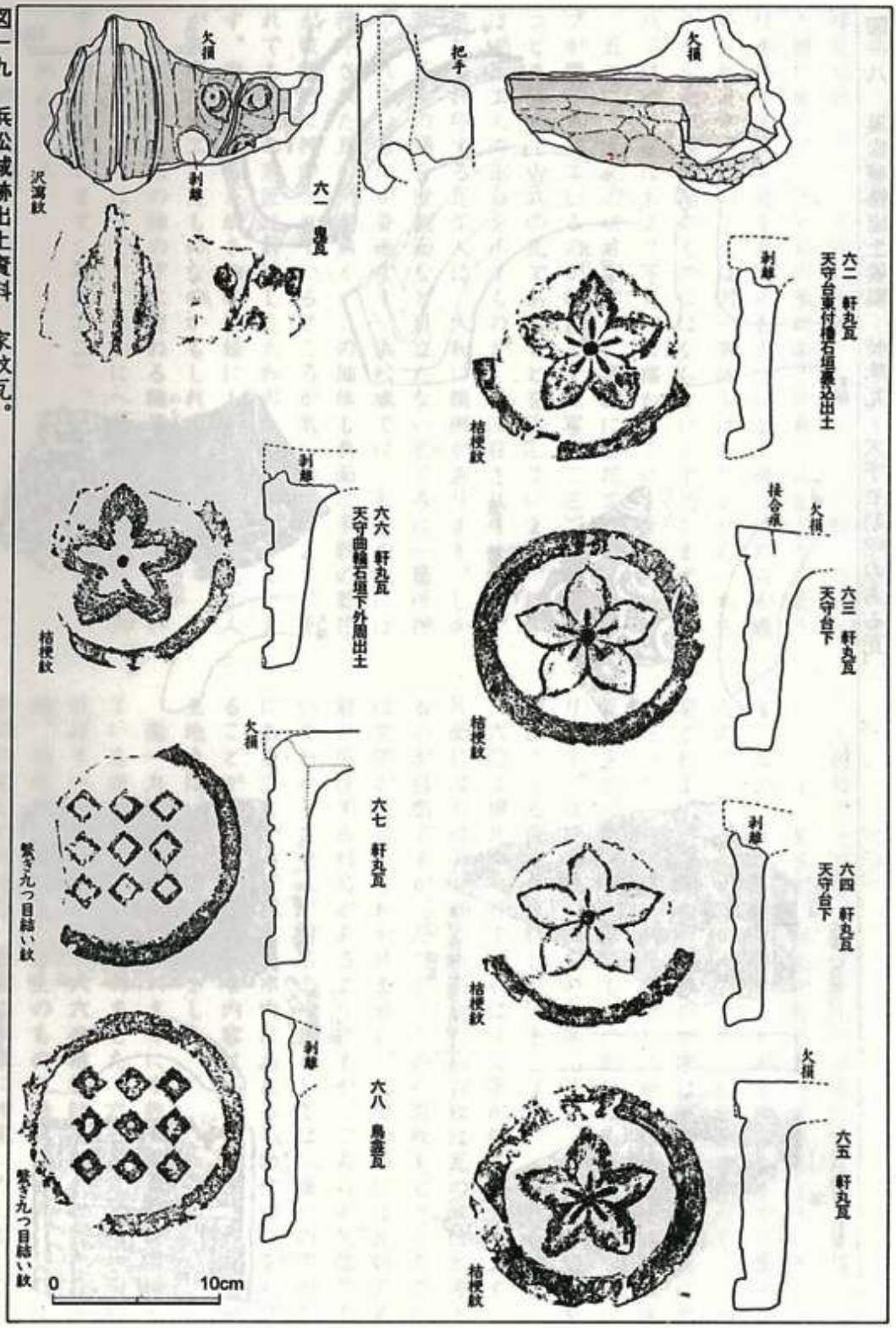
と読めそうです。「仕候」の上部にやや広く空間があって、よく見ると、粘土が削り取ってあるように思えます。面倒な仕事を仰せつかったが××したとでも表現したのでしょうか。瓦工人のうちだれかが書いたものと推定されますが、空白の部分の文字はあまりに不穏当に思ったのか、焼成前に削り取ったのかもしれません。輪違瓦であればいずれにしてもこの部分は人目に触れなくなります。江戸時代の工人の仕事ぶりや、施主との関係を想像させる貴重な資料といえましょう。

六〇は塀瓦の破片で、やはり文字が刻まれています。片面には日付の一部と八百枚、八百枚は瓦の単位と考えるのが自然ですが、ただし、この八百枚をどうしたのかは文字が欠落してわかりません。反対の面には瓦師の名前と居住する村名があるようですが、こちらも欠落していてわかりません。村名の候補としては「信」の字が下にあることから、現浜松市内にあたる「助信村」をあげることができます。詳細な内容は不明です。この瓦の出土地点は、図一〇に示しました。

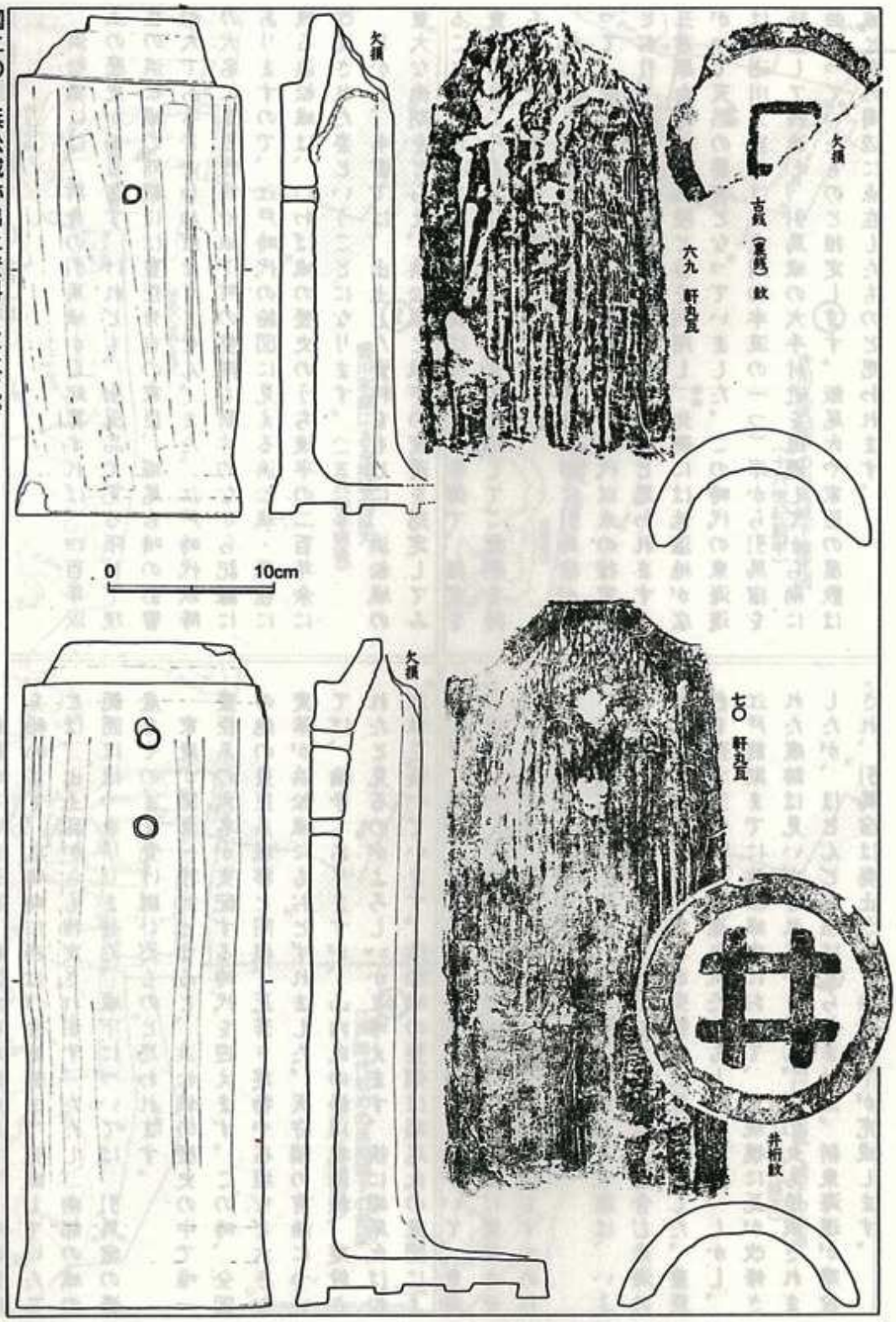
図一九・二〇には、これまでに市教育委員会が掌握している出土家紋瓦をまとめました。六一の鬼瓦破片を除けばすべて軒丸瓦です。六六の桔梗紋瓦は太田氏の前任地、西尾城（愛知県）出土のものと酷似します。このほかの大名との対比は、巻頭の年表に推定いたしました。

図一八　浜松城跡出土資料　特殊瓦・文字や刻印のある瓦。





図一九　浜松城跡出土資料　家紋瓦。



図二〇　浜松城跡出土資料　家紋瓦。

浜松城と城下の変遷

浜松城には、前身の引馬城から起算すれば、四百年以上の歴史があります。けれども、出土品で見る限り、現在の浜松城の外観には豊臣秀吉の家臣、堀尾吉晴の影響が大であるといわねばなりません。また、江戸時代以降の大名による改修や城下町の整備も断片的ながら記録にありますので、江戸時代の絵図に見える浜松城・現在に残る浜松城は、いわば城の歴史のうち後半の二百年余に改変された姿ということになります。

しかし、本書では、出土した資料をもとに、浜松城の重大な画期をとらえ、浜松城と城下の変遷を想定してみることにいたしました。根拠は現在なお希薄で、推定を重ねるところもありますが、あえて呈示してご批判を待ちたいと考えます（図二一）。

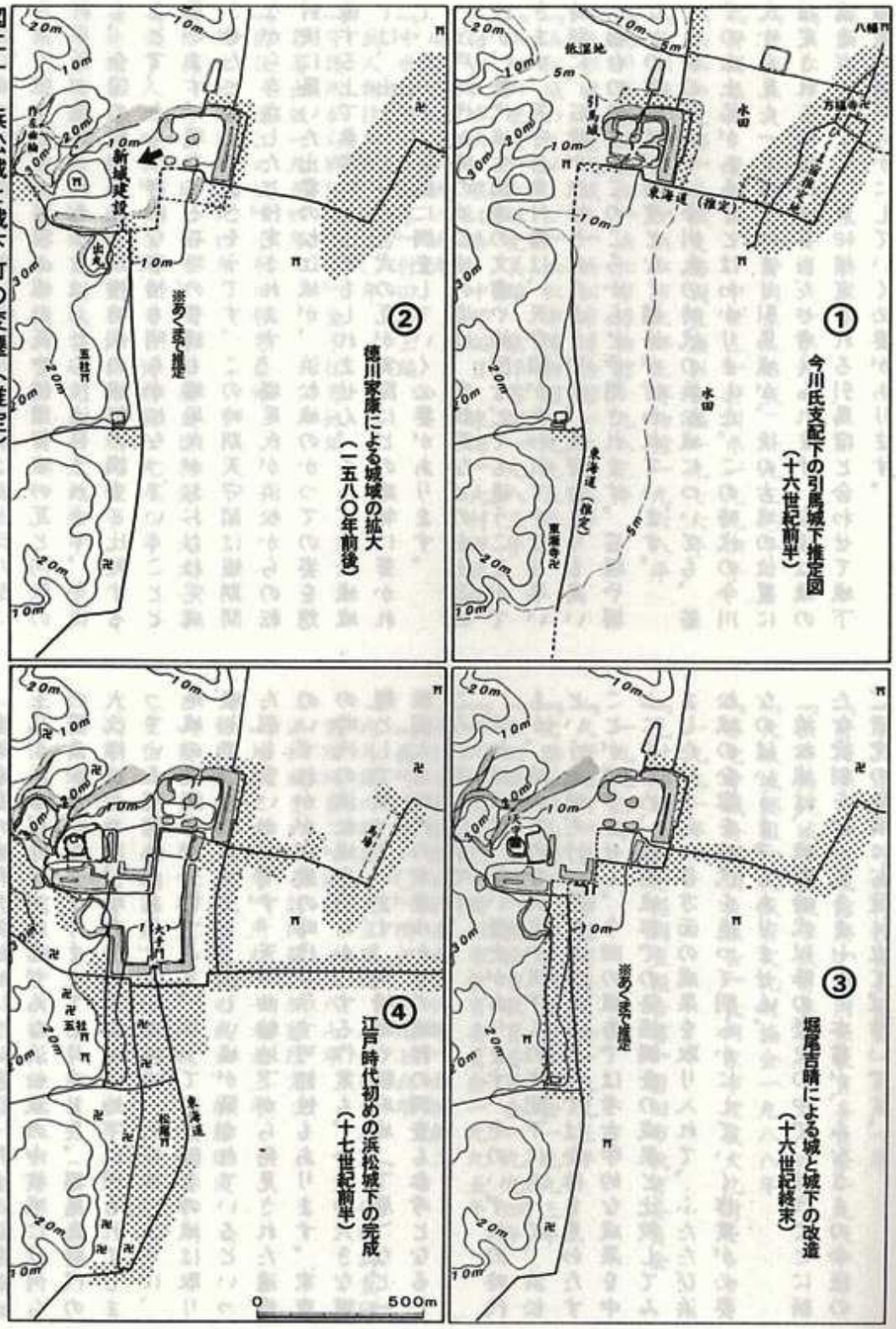
今川氏支配下では、現在の市街地北東部に引馬宿があって、栄えていました。引馬城は江戸時代以来の推定のとおり、後の古城の位置に存在したものと思われます。三方原台地端の丘陵と谷を利用し、北側には低湿地が広がって天然の要害となっていました。この時代の東海道は馬込川（当時は天竜川の本流の一つ）岸から引馬宿を経由して西進し、引馬城の大手付近を通過してから南に曲がっていたものと推定します。飯尾氏や家臣の屋敷は城と宿の周辺に点在したものと思われます。

家康が入城すると、戦国大名の拠点として、城の拡張を始めます。在城時に西は作左曲輪まで完成していたことは、出土品からも推定されます。ただし、南部の城の範囲ははっきりしません。城下については、引馬宿の資産をそのまま受け継いだものと思われます。

家康が関東へ移封となると、浜松城の歴史の中で唯一豊臣系の大名が支配する時代を迎えます。この時、全国の他の豊臣系城郭と同様、瓦葺き建物や石垣など大きな変革が浜松城にもおとずれました。天守閣の有無については、論争もありますが、山内氏の掛川城同様、建設されたと見るのがよろしいかと考えます。後に堀尾氏は松江城を築いています。浜松城の整備は堀尾氏の意図によるだけではなく、背後には秀吉という人物がいて、東海の諸城について共通する方針があって、同時に変革させているのです。この時期には、城下町の整備もすすめられたものと予想されます。

堀尾氏入城の十年後、関ヶ原で勝利した家康は、いよいよ天下人として全国を掌握します。浜松を含む東海の城には、譜代の有力大名が交替で配置されました。豊臣色を残す天守閣は廃棄されたかもしれません。しかし、江戸前期までに浜松城内において、大規模に瓦が改修された痕跡は見いだされていません。三の丸も造成されましたが、ほとんど石垣は見られません。新東海道が建設され、引馬宿は廃止されて浜松城下が完成します。

図二一　浜松城と城下町の変遷（推定）



浜松城四〇〇年のうち、堀尾氏の業績は出土品の瓦に色濃く残ります。石垣山城の瓦や横須賀城の瓦と同紋の軒平瓦が確認されたことは、とくに注目されます。今後も、全国の織田・豊臣政権時代の城郭の調査と比較することで、さらに詳細な事情も明らかになっていくことと思います。現存する石垣の普請も堀尾氏がおおむね完成させたと考えてよさそうです。この時期天守閣は短期間ながら存在したと推定されます。堀尾氏が浜松からの転封後に築いた出雲の松江城が、浜松城のかつての姿を想像する上で参考になるかもしれません。また、浜松城城では、出土している古式の瓦が実際にどの建物に葺かれていたのか、詳細に調査していく必要があります。

江戸時代以降の浜松城の姿は、家紋瓦などの出土品のほか、歴代城主関連の文書や絵図などでも追うことができます。天守台東付櫓は、天守閣が失われてかなり早い時期に、石段が改修されたようです。天守台よりも高い八幡台の存在もこのころからと予想されます。石垣や塀などの建物は、何度となく補修が行われています。

さかのぼって、今川氏の時代の浜松城についても、若干の出土品があることはわかりました。この時代の今川氏から見た一支城、つまり引馬城が、後の古城の位置に推定されるのはほぼ妥当だと考えられます。今後は城の構造だけでなく、東に推定される引馬宿と合わせて城下の実体を明らかにしていく必要があります。

徳川家康の時代の浜松城については、作左山に関連出土品があるだけで、かんじんな浜松城の中核城には何らの要素が見いだせないままでありました。堀尾氏時代の大改修によって、現存する浜松城の地下に埋もれてしまっている可能性があります。姫路城や大坂城のように、地城の支配者が交替すると、かつての支配者の城は取り壊してさらに盛り土し、新しい城が築かれているといった例も多いからです。天守曲輪地下から発見された遺構のいずれかが家康の時代を示す可能性もあります。家康の時代の浜松城を明らかにする作業も、今後の大きな課題として残っています。岡崎城や駿府城（下層）など一戦国大名時代の家康ゆかりの城郭の調査も参考となるところが多いはずです。

浜松城には、長い歴史があります。そのいずれの時代もが、時の有力な大名や天下人の支配下にあって、浜松という地城だけに限定して見るだけでは全体を見わたすことができません。今回の報告では考古学的な成果を中心にまとめ、各地城郭での発掘調査の成果と比較してみました。さらに各方面の成果を取り入れて、ふたたび浜松城の全容を時代を追って明らかにしていく作業が必要なのはいうまでもありません。

浜松城は、戦国時代以降の歴史の中で、時代ごとに新たな役割を担ってきました。本書が、みなさまの今後のご研究の発展にお役に立てば幸いです。

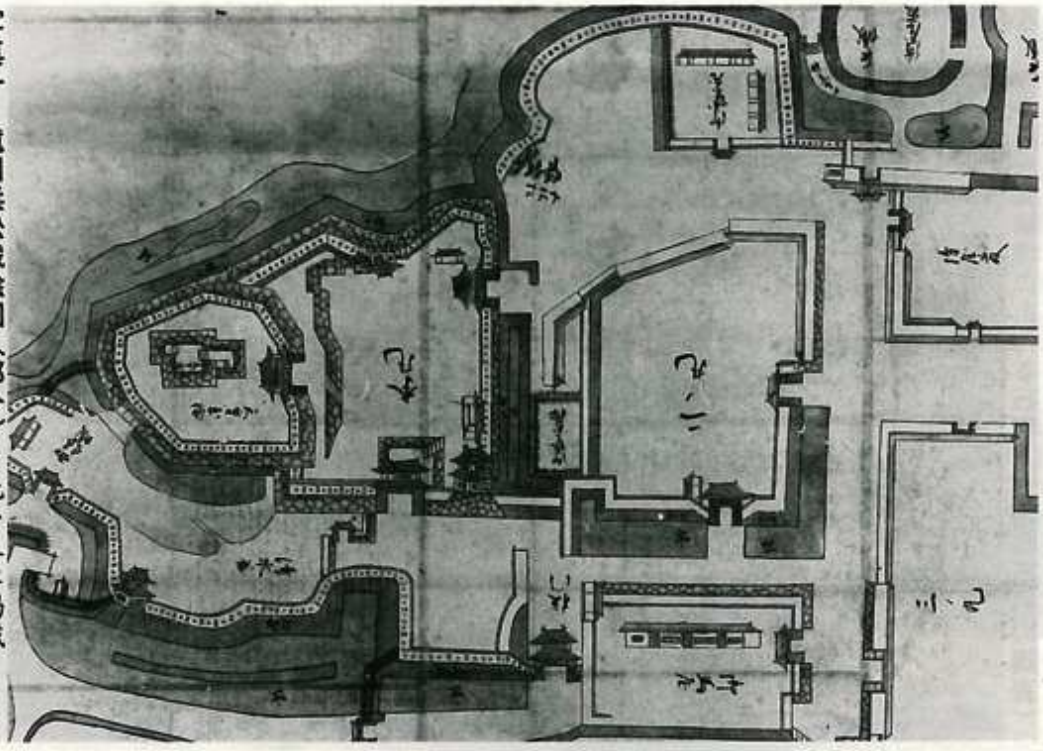
参考文献

『浜松市史　一～三』浜松市
『浜松市史　史料編一～六』浜松市
『静岡県史　第一巻』静岡県（旧版）一九三〇年
『静岡県史　資料編7　中世三』静岡県一九九四年
『浜松の史跡』浜松史跡調査顕彰会編一九七六年
『浜松城と浜松藩』浜松市立郷土博物館一九六八年
『徳川家康と浜松』浜松市博物館一九八三年
『浜松城と歴代城主』浜松市博物館一九八八年
『浜松城のイメージ』浜松市博物館一九九五年
『浜松の歴史』大塚克美編　東洋書院一九八三年
『藩史大事典　第4巻　中部編II　東海』大村礎他編
雄山閣出版一九八九年
『中世城郭研究論集』村田修三編
新人物往来社一九九〇年
『守護所から戦国城下へ』金子拓男他編
名著出版一九九四年
『図説・遠江の城』小和田哲男監修
郷土出版社一九九四年
『信長・秀吉の城と都市』岐阜市歴史博物館一九九一年
『天下人の時代』山梨県立考古博物館一九九二年
『発掘された駿府城跡』登呂博物館一九九四年
『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭研究会一九九四年
『浜松城天守曲輪周辺の発掘調査について』
浜松市教育委員会一九八四年
『城山遺跡』可美村教育委員会一九八一年
『静岡県の中世城館跡』静岡県教育委員会一九八一年
『摂津高槻城』高槻市教育委員会一九八四年
『大坂城跡III』太阪府文化財協会一九八八年
『勝竜寺城発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財センター
一九九一年
『見付端城遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会
一九九三年
『久野城IV』袋井市教育委員会一九九三年
『史跡石垣山III』小田原市教育委員会一九九三年
『吉田城址（I）』豊橋市教育委員会一九九四年
『掛川城大手門』掛川市教育委員会一九九五年
「浜松市動物園内作左山横穴墳」向坂鋼二
『森町考古一〇』所収　一九七六年
「内耳鍋の研究」足立順司　『静岡県埋蔵文化財調査研
究所紀要二』所収　一九八七年
「浜松城をめぐる諸問題」加藤理文
『地域と考古学』所収　一九九三年
「静岡県内における家紋瓦の成立」加藤理文
『静岡県考古学研究二五』所収　一九九三年
「豊臣政権下の城郭瓦」加藤理文
『織豊城郭創刊号』所収　一九九四年
「浜松城をめぐるイメージ」小和田哲男（講演要旨）
『浜松市博物館館報VIII』所収　一九九六年
『宗長日記』島津忠夫校注　岩波書店一九七五年

報告書抄録

書名	浜松城跡（はままつじょう）
副書名	考古学的調査の記録
編集発行機関	浜松市教育委員会　浜松市元城町
編著者名	太田好治（浜松市博物館）
発行年月日	西暦一九九六年三月一五日
所収遺跡名	浜松城・引馬城・作左山横穴
所在地	浜松市元城町・松城町・元目町他
遺跡コード	22202　12-14, 12-15, 12-16, 12-17
緯度・経度	三四度四二分、一三七度四三分
調査期間・面積	一九六〇年以来数回、百平米未満
調査原因	市庁舎建設・公園整備事業その他
主な遺構・時代	石垣・堀（戦国）横穴墳（古墳）
主な遺物・時代	瓦・石塔（戦国～江戸）須恵器他

浜松市指定文化財
浜松城跡
考古学的調査の記録
一九九六年三月一五日
編集発行　浜松市教育委員会
〒四三〇　静岡県浜松市元城町一〇三の二
印刷　桐屋印刷株式会社



写真一　遠州浜松城絵図（部分）　北を上に掲載

写真二　市役所北地下駐車場建設現場で発見された石垣　一九七九年の市役所工事で発見されました。上の絵図に見る、本丸と御誕生曲輪の間の堀にあたります。

写真三　清水曲輪境にあたる石垣（一九八五年の調査）

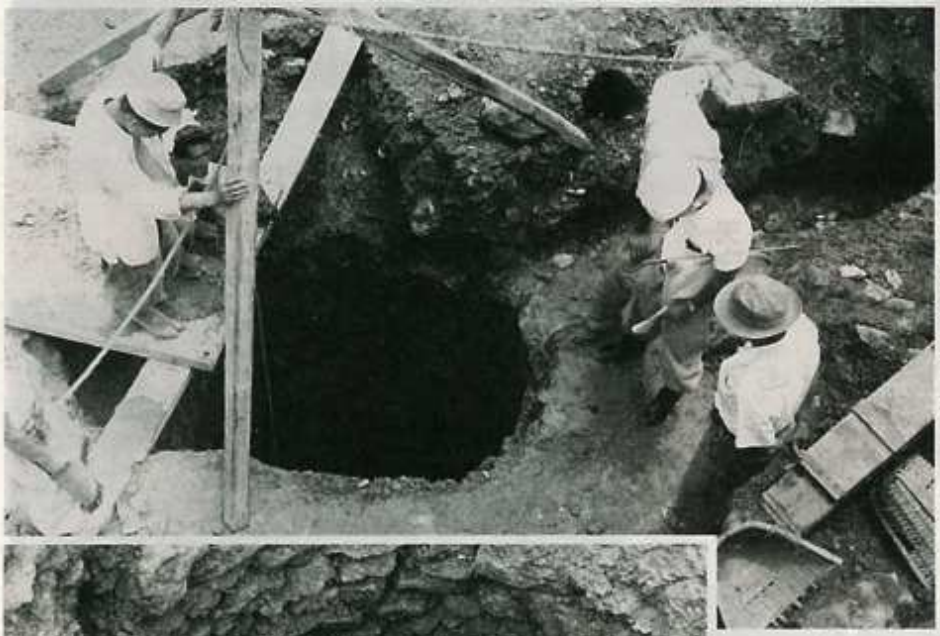
写真四　現存する天守台石垣と東付櫓の石垣（部分）
一九六〇（昭和三五）年一月に撮影されたものです。
石垣角の算木積みのようすがよくわかります。

写真五　天守台と東付櫓石垣の全景
一九六〇年一月撮影。天守閣復興前後に植樹された樹木がまだあまり大きくないので、観察が容易です。

写真六　天守台西、八幡台
一九六〇年一月撮影。

写真七　天守曲輪全景
一九六〇年四月、北東から撮影。画面左端は、当時の市役所です。

写真八　復興天守から見た浜松市街
一九六〇年一月撮影。画面手前の左が元城小学校、右が市役所です。



写真九　天守台地下井戸の発掘
一九五七年、復興天守閣の建設に先だって、天守台の地下井戸が調査されました。

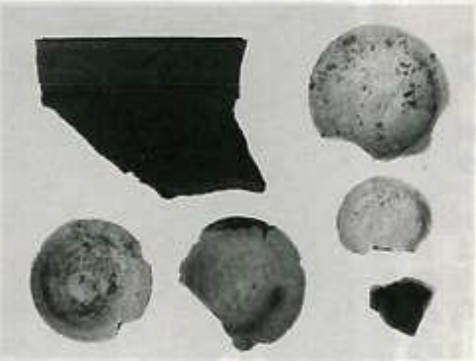
写真一〇　天守台地下井戸

写真一一　作左山横穴墳の床
一九六四年に旧動物園内で発見、調査されました。

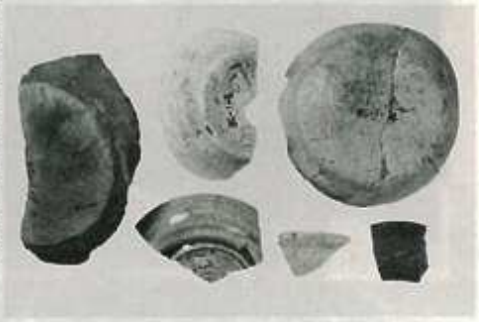
写真一二　天守曲輪外周地下発見の石垣
一九八四年の電線地中化工事立会調査で、発見された未確認の石垣です。

写真一三　天守門地下の瓦敷設
一九八四年の調査で発見されました。平瓦が並んでいます。

写真一四　東照宮出土土器



写真一五・一六　作左山横穴上部覆土出土土器



写真一七　作左山横穴出土須恵器

写真一八　石垣転用一石五輪塔

写真一九　宝篋印塔

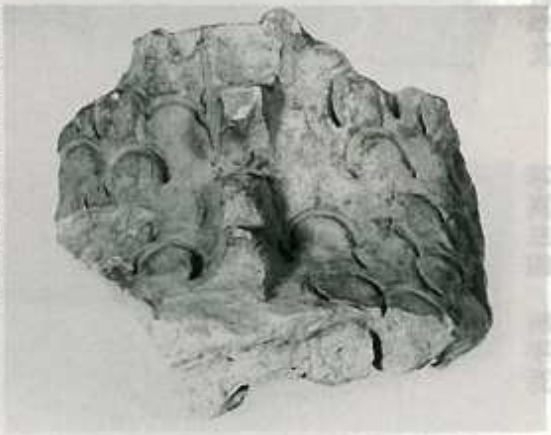
写真二〇　石臼(茶臼)

写真二一　鯱瓦ひれ破片

写真二五・二六・二七　軒丸瓦

写真二二　文字刻み瓦

写真二三　菊花押印のある瓦



写真二四　鯱瓦体部破片

写真二八　軒平瓦
堀尾時代のものと考えられます。

写真三〇　軒平瓦

写真二九　軒平瓦

写真三一　軒平瓦

写真三三　軒平瓦

写真三二　軒平瓦

写真三四　軒平瓦